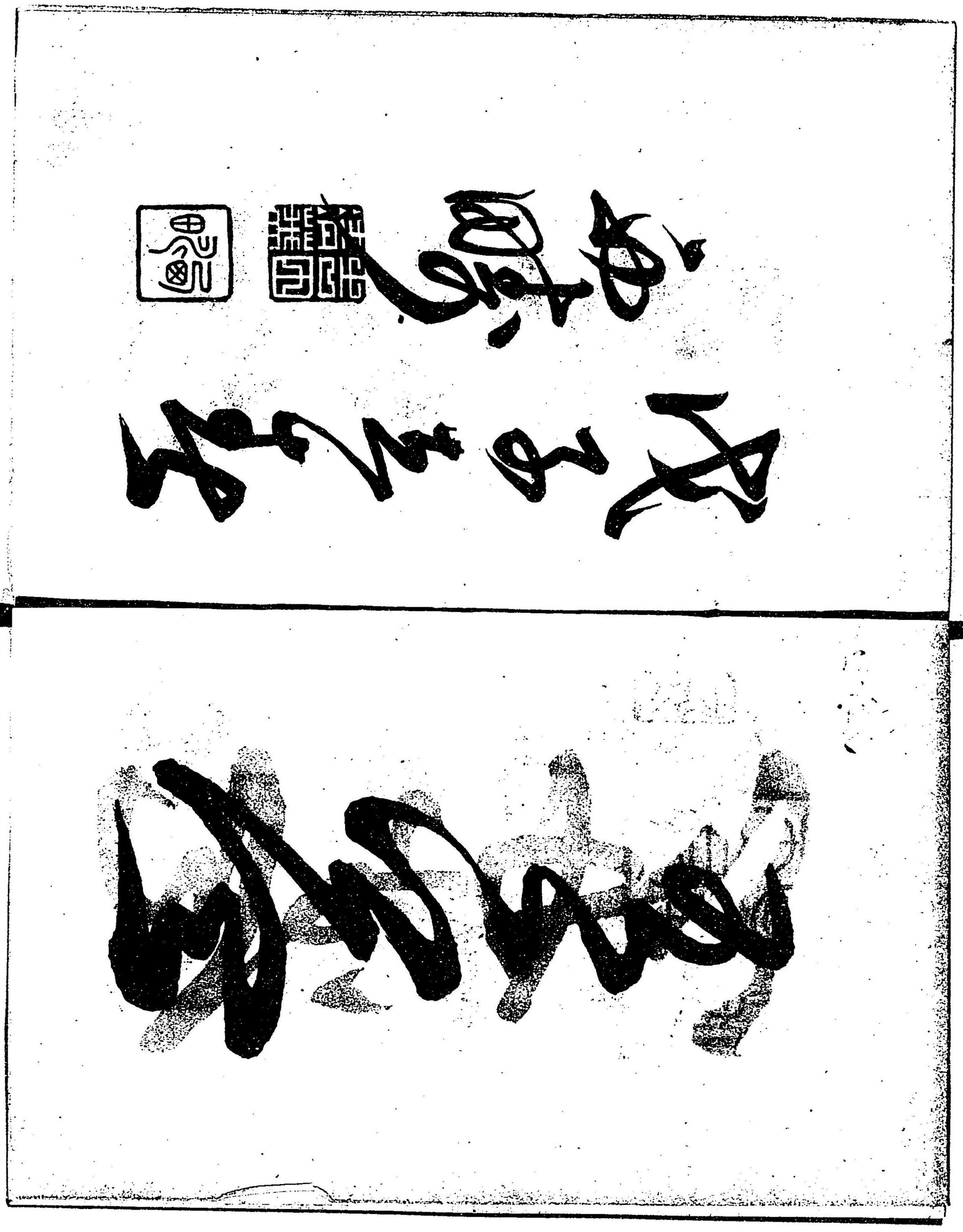
ヨ-21
No.8926



不思議辨妄序

不語怪力亂神於孔子之時爲然使怪力亂神絶跡於人間則理學之所當勉也新井君著不思議辨妄將着先鞭於此舉余亦曾有私所期今得見此著幸甚乃相約曰語怪力亂神吾黨猶人也必也使無怪力亂神乎此日正除夕於窮鬼群集之中說驅妖怪之術抑亦奇書以換序

明治二十年盡之日

天台道士　杉浦重剛題

不思議辨妄緒言

書冊にして世を利する者あり世を害する者あり世を益するの書は固より之を作るべし世を害するの書は之を作らざるの優れるに如かざるなり我邦今日書冊の出版日に増し月に多く漢人の所謂許牛充棟の語借て以て之を評すべし是れ吾人の我文運の爲に大に賀する所なり然れども其書冊にして果して世を利する者多きか世を害する者多きか將た世を利する者世を害する者相半するか吾人此問題に遭遇せば寧ろ世を害する者多しと答へんと是れ亦吾人の我文運の爲に大に悲む所なり吾人は之と悲むと同時に此冊子を著述するの止むを得ざるに至れり凡そ書冊を著さんと欲する者其果して著さざるべからざ

るの原素なければ必ず發して世を害するの書冊となるべし吾人は實に奇利を漁せんと欲する者にあらざるなり唯果して著さざるべからざるの大原素あるを以て遂に發して此書となれるなり

吾人は寂寥の夜三更獨り出で仰て寒月一點中天に輝くを覩俯して村犬數聲林外に吠るを聞き進んで畫尚ほ暗き蓊鬱たる森林を過るの際忽然として背後に聲あれば實に胸惕然として悸れ肌忽爾として戰き必ずや恐怖の念を發するならん此恐怖の念て實に吾人を驅て此書を著述せしむるの原素となれり夫れ吾人て盜賊を恐るる者に非るより又豺狼を怖るる者にあらざるより然るに何故に此恐怖の念を發したる乎西人曰く習慣は第二の天性なりと宜なる哉吾人は幼少より幽靈幼怪の妄誕を聞き狐狸天狗の虛說に慣れ今日假令文明の學術を講じ理智の眞理を究むるも魯帝ピートルの終身水を恐れしが如く全く之を腦裡より驅逐せしむる能はず遂に前述の場合に於て思ふに恐怖の念を發する者なり噫吾人は再ひ卯角の兒童たらんと欲するも能てざるなり故に吾人は唯第二の文明日本を組織する兒童の潔白なる腦中に之を注入せざる樣勉むるの外なし若しも此議論をして誤らざらしめば此書は暗暗たる文明の道中をして我日本國民の爲に庶幾は一點の燈火たらん乎

然り而して吾人の此書を著述せんと欲するの原素は啻に前段の單一なるもののみならず政治上學術上に渉て大

と複雑なる者なり然れども吾人は今一一之を列記し之を概括し之を世に利あるの書册なりと自ら斷言を下すは甚だ好まざる所なり何ぞなれば世間自ら公論公評の存する者にして或は冷待を蒙り或て厚遇を受るも自然にして然れば

此書を讀む者必ず言はんか篇を擧くる少なく論ずる所甚だ簡單なり何故と其れ然るかと吾人て固より此非難の無理ならざるを信ず然れども吾人に於ても抑も說あり夫れ今日の日本は昔日の日本と非ず實に一歩を文明の境域に蹈込みし日本なり今日の日本人は昔日の日本人に非ず實に幾分か文明の智識を得たる日本人なり若し其非難者が頑固にも必らず昔日の日本なり昔日の日本人なりと言はば吾人も前數篇を精細と解明するの勞を辭せざるべし然れども吾人は昔日の日本と あらず昔日の日本人に非ず と確信して疑はざるを以て斯く簡單に叙述し去るに至れり然らば何故と昔日の日本にあらず昔日の日本人とあらざれば斯く簡單と說き去らざるべからざるか曰く只夫れ昔日の日本にあらざるなり故に何如なる山間にも一二の學校あらざるなく何如なる僻邑にても一二の庠序あらざるなし只夫れ昔日の日本人に非るなり故に卯角の童も能く大陽の定靜を說き晷亂の兒も能く地球の運動を論ず之を要するに天文地理の教育大に我日本に進入せり天文地理の學術少しく我日本人に浸染せり故に吾人は此書と於て特に之を精細に解明するの必要を見ざるなり

此一句自記事始後之例未

吾人い固より前述の如き論難は毫も恐れざる所なり唯吾人の淺學努才殊に文字に嫻はざるより專ら通俗を旨とし行文の平易を勉めたれども奈何せん其平易なる處無味澹伯或は却て卑俗に流れ又其嚴格なる處字句暗澁或い通會に苦しむる者蓋し多からん是れ讀者の望を滿足せしむる能はざるして吾人が大に之を謝する所なり然れども寛大なる讀者い此の如き瑣瑣たる末事を咎めず通編を玩味して其全鼎の眞味を探求せらるるは吾人の確く信じて疑はざる所なり

明治二十年八月

著者識す

不思議辨妄

目次

第一篇　總論

第一章　本書の趣意

第二章　神佛

第三章　人心

第四章　物我

第二篇　變地

第一章　常陸の應答池　附人聲を以て洪水を退ふを論す

第二章　四國の奇岩石　信濃の古佛像　附高山に貝殼あるを論す

第三章　琵琶湖の簑火　附狐火或い鬼火の事

第四章　筑紫の不知火

吾人ハ固より前述の如き論難は毫も恐れざる所なり唯吾人の淺學努力殊に文字に嫻はざるより專ら通俗と旨とし行文の平易を勉めたれども奈何せん其平易なる處無味澹伯或は却て卑俗に流れ又其嚴格なる處字句暗澁或ハ通會に苦しむる者蓋し多からん是れ讀者の望を滿足せしむる能はざりて吾人が大に之を謝する所なり然れども寛大なる讀者ハ此の如き瑣瑣たる末事を咎めず通編を玩味して其全鼎の眞味を探求せらるるは吾人の確く信じて疑はざる所なり

明治二十年八月

著者識す

不思議辨妄

目次

第一篇　總論

第一章　本書の趣意

第二章　神佛

第三章　人心

第四章　物我

第二篇　變地

第一章　常陸の應答池　附人聲を以て洪水を遏ふを論ず

第二章　四國の奇岩石　附高山に貝殼あるを論す　信濃の古佛像

第三章　琵琶湖の簑火　附狐火或ハ鬼火の事

第四章　筑紫の不知火

第五章　本所の幽靈橋
第六章　淺草の姨か池
附　鳴雞の雄雞ゐ化すると云ふ事
第七章　京都の柊明神
附　羽州米澤ゐて柚樹の枳ゐ化する事
第八章　奈良の二日堂
附　地中に川ある事を論ず
第九章　勢田の龍宮穴
附　海中ゐ川ゐる事を論ず
第十章　江戸の星移井
附　甲州星井村の井
鎌倉の星井
第十一章　八幡の八幡不知
附　古井或穴藏ゐて俄に人の氣絶する事
猥ゐ佛舍神宇と開けは忽ち眼潰れ手萎るゝと云ふ事

第三篇　奇物

第一章　太宰府の飛梅
第二章　高砂の相生松
第三章　首縊り松
附　死靈の池
第四章　斧の入らさる神木
附　靈山名城ゐ制禁ありしは戰國の遺風なる事
武州高麗郡天狗の化杉の事
第五章　祐天上人の劔難除
附　成田山の守り札
祐天和尚糸引の妙號
第六章　金比羅の鰐口
淺草寺の鐘自ら鳴り出せし事
第七章　三井寺の晩鐘
第八章　天國の寶劍

不思議辨妄　終

不思議辨妄

新井周吉著述
大矢森之助補助

第一篇 總論

第一章 本書の趣意

寒燈影暗く万籟漸く斂まりし後吾人窃に以謂ひらく夫れ亞細亞洲の地形たる山巍々として其れ高く水洋々として其れ深く隨て氣候溫熱相交り暴風あり大雷あり凡て不思議の感想を媒介とする足る者甚た多し就中我日本の如き所謂溫帶の現象と熱帶の現象と両あがら之を備ふるを以て亞細亞洲中尤も奇怪不思議の事物に富む所なりとす何とあれば我邦を去て寒帶に在し先んか山川草木より禽獸蟲魚に至るまて皆寒帶の物に止まるべし又我邦として熱帶に位せしめんの雪あく霜なく山川の風景より空

中に飛び地下に蟄する動物に至るまて又皆熱帶の物ゑ止るべし只夫れ然らす禽獸虫魚ハ勿論空中ゑ出現もる諸現象に至る迄熱帶の物なり寒帶の物あ𪜈忽ゑして雪降り忽にして水涸る斯の如くあれど未だ理學之れ知らす人智之れ開けず大陽ゑても大陰にても其何物たるを解せざるの中古以上にはゑ𪜈は事々物々皆不思議の思を爲し大雷に遭ひ暴風ゑ遇ふ毎に忽ち之に恐怖ゑ直に之を神の所業と なゑ實に怪むに足らざるなり加之僧侶神巫の輩巧に妄誕を說き虛說を傳へ之を妄信せし𪜈遂に我邦をして俗說の叢林たらむしむるゑ至る豈ゑ嘆もべきゑあらずや

嗚呼我邦ハ奇怪の現象不思議の事物に富むの地なゑ𪜈妄誕を搆ふるゑ至便あるの地なり民心を惑溺せしむるゑ至利なる地あり然れども又側面より考ふれば斯の奇性の現

象と斯の不思議の事物に富むを以て學理を研究するに必需なる地なり原理を考探するに必要なる地あり智識を開發するに再び得べからざるの地あり故ゑ時世と人心ゑ因り或は至害たるべく或は至利なるべし然り而ゑて余輩の考察ゑ依れば其今日に至るまで我國未ゑ蒙昧の域たるを以て之を利用するを知らず却て之を害用したり然るに今や西洋の新學我國に入り人々皆其學術の方向を變し地理生理其他百般の學術に至るまで之を研究する者日に多く必ず文明の眞成人となり我地勢を利用するゑ至る將ゑ遠ゑあふざらんと豈喜ばゑかふずや

然りと雖も天地間の事物一として障碍物あらざるはなし行かんと欲すれば必ず山河の險あり航せんと欲すれば必ず風濤の難あり社會の進歩に於ける豈亦障碍物あかち

んや其數一にして足らずと雖も嚮に所謂妄誕虚説なる者其一障碍物さる疑を容るべからざるべし試に思へ今の子弟さるもの學校に入りて文明の學術を講じ天体を論じ地形を説き喋々として眞理の在る所を明にするも其父兄なるもの野蠻の妄誕に據り之を駁し蒙昧の俗説を以て之を斥くる時は其子弟たるもの豈ふ能く學校の教を奉せんや好しや其父兄夙に悟る所ありて此害を除かんと欲せるも乳母僕婢の妖怪不思議の様を書て書籍に妖怪不思議の事を述へ劇場に寄席に妖怪不思議の談話を演述講談せるを奈何せん學校の教を奉ずるに至る豈に遠かふずや苟も能く學校に教を奉せざれば則我邦をして文明の眞人たらしむる期すべからざるなり

余は數年來地方の教育に從事し學校教育の障碍を爲すは實に家庭教育の開けさるに依るを知れり而して其家庭教育の開けさるは神佛に迷信し野蠻の俗説に惑溺するに因るを覺れり故に窃に以謂らく今の人民をして智識を開發せし所謂文明の思想を懷かしむるには就學の法嚴にせざるべからず教導の道改めざるべからずと雖も然とも舊來の妄誕を排除し虚説を撲滅するより大且つ急なるものなしと然而して實際に於て之を排滅し愚夫愚婦をして眞成れ悟道を開かしめ理智の世界に承服せしむる容易の業にあらず例へば唯宇宙間の現象必ず不思議なる者なく地球上の事物決して奇怪なる者あらずと言のみならんか所謂大言里耳に入り難く彼の愚夫愚婦輩は必ず相率て將に言はんとも論より證據誰誰は雷を罵て之が爲に擊れたり誰誰は佛を誹て盲目となれり彼處には何何の奇怪あり此處には

何何の不思議ありと故より苟も其感溺を極ひ妄説を排せん
と欲せば須らく先つ人口に膾炙せる俗説を辨解し其眞理
を證明せざるべからず是れ則ち余の此書を著述せし所以にし
て庶幾は以て野蠻の俗習を破壞し文明進歩の媒介たるを足ちんか」
抑も事物の道理を説き其蘊奥を窮むるは余輩の如き淺學
庸才の為て能くもべきにあらず然れども余輩の目的とす
る處此處に在らす只古昔より民心に感染せる妄説虚誕を
辨解するに過きず是れ先つ大方の讀者に向て茲に注意を
請はんと欲するなり而して其妄誕虚説を辨するには第一
神佛の迷ひ第二人心の作用第三物我の辨此三類を明にす
るの尤も領解し易きに如ものなし故に次章より逐次之を論述
すべき蓋し余輩は飽迄も此三問題の妄誕虚説の叢林を
鑿開するに最も必要なる斧鉞なるを信ずればなり

第二章　神佛

我邦の所謂神とは不思議といふことに換名ふして決し
て實體なる者にあらず蓋し上古野蠻の時代に於ては前章
已に述べたるが如く人智未だ開けざるを以て事物の理を
判斷することを能はず何事にても不思議の事あれば直ちに
之を神の所業に歸し不思議なる所乃ち神の存在する所と
なせり是を以て日月の動くを見ては是を神の力となし風が
吹くも雨が降るも雷が鳴るも地震が揺るるも皆之を神の所
業となし山岳高く空際に聳へ木石堅く地上に留るも亦皆神
の所業と信ずるが如し加之貪利妄厲の人あり巧に神威に托
し種々様々詭詐妄誕を設け以て人心を欺きたるは是即ち神
の起りたる所以なり

故に神は人民の無學文盲にして事物の理を知らざるに

り日月星辰の運行疾病雷雨の事等悉く神の心より出る者と妄信し甚しきに至つては英雄豪傑の事業皆神助を得ると

る者となし遂に尊信して一心不乱に之を祈禱するに至れる者あり其起因既に已に此の如き故に人智の漸く開けて事々物々の道理を辨解するに隨つて神の勢力を失ふ者なること事實に徴して知るべし乃ち我邦にても人智の進歩もるに隨ひ人民の次第に神を粗略にするは掩ふべからざる事實あるにあらずや然りと雖も不思議なるもの之れあきにならず乃ち人類の魂は誰が造りし者なるや世界の運轉は誰が始めし者なるや地に匍ふ蟲も四ッ足や空翔り行く鳥類は果して誰が造りし者なるや是等の事も皆凡て眞の不思議の事といふべきものにて西洋にては之を造物主の力なりと云へ

然り而して其之を解せる者の言に曰く造物主なる者い日月星辰地球人物等萬有を去て自然に生成し自然に淘汰し自然に修善せしめ宇宙の大機關を運轉し古今世界盛衰禍福命運を統攝し萬善の由て出る所の者眞理の由て出る所者知らざるの所なし而して其實体たる見るべからず窺ふべからざる者ありと故に人若し世界の運轉四時の變化の如き大運動の大機關を自然に生て然りと言へば其答に曰く其自然なるものは然らしむる廣大無邊なる大智大能者あるを[illegible]名けて造物主といふなりと故に之を信じ之を尊ふも敢て其理あきに非れども我邦の如く日輪を祭り山河を祭り甚しきは木若しくは金石を以て造りたる偶像を祭り之を神と信じ平身低頭するが如きは豈に笑ふべきの甚しきにあらずや否嘆ずべきの甚しきにあらずや

若し人あり神とは如何なるものなるやと問わば吾輩い之に答て言はんとす情慾も無く意思もなき虚位無形の道理なりと何となれば物体の地に落つるは引力の力なり故に引力は物体を地上に落もの神なりと云ふべし草木の生長もるは水土と日光との力なり故に水土と日光とは草木を生長せしむるの神なりと云ふべし其他人類の魂なり世界の運轉なり地に匐ふ蟲や四ゝ足や空翔り行く鳥類も皆夫ゝの道理あり其道理こそ是れ之を真の神とは云ふべけれ

右の如く道理即ち神なりと云へば其道理なるものは誰が造し者なるやと疑ふ者あるべけれども是れ實に至高至尚の問題にして博學哲士が常に相討論して未だ一定せざる所あり而して之を茲に論述するの必要あれば敢て書せず唯夫れ神は情慾もなく意思もなき虚位無形の道理なりと信じて我邦人の如く偶像を信せざれば庶幾は大差なるべし

因に云ふ或人偶像を論して曰く下駄とある木固より能あり神佛の偶像となる木に至ては我未だ其能を知らず僅に之を斫り之を割り薪とおして風呂を焚のば或い其能を見んと

佛は今より大凡四千年の昔一印度國「セイロン」島に生れたる釋迦の述べたる教ゆして釋迦の此教を爲したるは實に已むを得ざるに出てたる者の如し蓋し釋氏の生れたる時は世未だ蒙昧に属し臣にして君を弑する者あり子にして親を殺す者あり紛々擾々として所謂人彝を解せざるなり是に於てか釋迦止むを得ず因果應報の教をなし地獄極樂を未來に設け恐嚇手段を以て人民を既暴に救ひ風俗を

既壊に極ひしおり斯の如きは各國其例少なからず孔孟の支那に於ける摩西の猶太教に於けるが如き皆然らざるはなし而して其方便として已れを以て神に比し或は神の使と僞り過去を以て說く者あり未來を以て戒むる者あり其間には種々の虛談と樣々の妄說を構ひ勉めて己れの說を信ぜしめんことを謀れり故に釋迦にあれ摩西にあれ耶蘇にあれ始めて說を唱ひて人を導かんとするより故らに虛誕妄說を搆ひて世人を欺きし者あり是れを悟らず身已に彝論の何物たるを解し五常の何物たるを知りあがら妄りよ幽暗の敎に惑溺し心身を蠻境に沒落せしむるい實に憫むべきなり

余嘗て之を論ず耶蘇と云ひ釋迦と云ひ曰く摩西曰く摩哈士其唱ふる所の者は皆人を救ふの手段にして是を之れ

宗敎と云へり而して其宗敎なる者は古に在りて未た世の開けざるに當つては誠に必要なりし者なり何則西洋の今日の開化も宗敎の戰爭と僧侶の宗敎論を研磨せしより知らす知らす發達をたる者にあらずや又我國に於ても若し神官と僧侶の有るに非れば文敎を維持して今日の開明を導くことと能はざりしにあらずや果して然らば其古昔に必要ある又論するを俟ざるなり然りと雖も其說く所人民の智識に準じて異なる者なれは年曆人智既に開けたる後迄傳ふへき者にあらず加之富士の高峯が一夜の中に聳然として東海の天に湧出しさるが如く余輩の尤も尊崇すべき學術なる者は實に現今の世界に突兀として聳え來りしにあらずや豈亦宗敎の虛說妄誕を須ひんや

夫れ國の文明とは法律の備はれるなり器械の整ひるなな

り然り而して宗教の經典中に蒸汽を發明するの術あるが曰く有るなきなり電線を設くるの術あるか曰くあるあきらかなり好しや一歩を讓りてこれなりとするも之を設くるは學術にあらずして宗教の力を藉らざるなり乃ち人倫を説くに脩身學あり器械製造を設くるに理學あり曰く何曰く何と未だ學術に因て證明し得ざる者なし吾人の前世い果して佛氏の説く所の如き乎吾人の未來は果して宗教に依て冥福を得べきか是れ亦學術に依て証明し得べきあり獨り之れのみならず吾人の生命を資る耳目鼻口各種の感應を全ふするは學術に在りて宗教の力に頼らざるなり果して然らは宗教は野蠻の時代に必要なして開明の今日に於ては既に無用の贅物のみ（本篇ハ爲スル所アリ故ニ宗教ノ文字上専ラ愚夫愚民の信迎スル神佛ノ上ニ就テ云ヘリ）

右神佛の略論なり尚ほ精しく述んと欲すること之れなきにあらずと雖も紙數限りあるを以て意の如くなる能はず而して我邦愚夫愚婦の惑溺する所は斯の如き高尚の点にあらずして唯神佛に靈ありと云ふあり例へば神を誹て不具となる者あり佛を罵て狂死せし者ありと云ふが如し故に余輩は次の數語殘して此愚昧を悟らしめ以て本論を終らんとす

余輩は我邦の所謂神佛を誹る者なり罵る者あり神佛靈あらば何故に余輩に禍殃を與へざるや

第三章　人心

世の開くるに隨ひ百般の事物變動を經ざる者なし例へは古昔人民が神として尊宗したる太陽と今日とては洪大なる一火塊となり而して古昔は其太陽が左りより右に回

轉するが如く思意せしも今日にては右より左りに回轉するとなれり雷の如きも古昔は様字を附して之を恐怖せしも今日にては電信局の用達となり提燈の代用となりたり而して古昔は網代籠に乗る者は必ず高貴の者にあらざれば能はざりしに今日にては幾田國手の死人か若くは病人若くは氣狂と極まれり隨て古昔は神体を論じ佛氏を誹ちが天罪立どとるに來り廢疾となり盲目となるとし大ゐ恐怖せる所なりしが今日よりて之を論じ之を議し甚しきに至ては神社佛閣を以て遊樂戯謔の場所とおもに至れり而して此の如く天下の事物に變動を來たると果して何の故おつて然るか全く人心變動の然らしむる所と云はざるべからず然らば其人心と何故に斯く變動もるか是れ本章の辨明せんと欲する所なり

抑人心の變動する所以を考ふるに全く智力の進歩したるに依れり蓋し人心たる者と智情意の三種よりなり人心此勢力の一勢若しくは二勢若しくは三勢を交互に發生して此世を愉快にも不愉快よりも經過するものなり故に若し人心の變動そる所以を知らんと欲せは須く先つ此三種の如何を知悉せざるべからず

智とは智覺し記臆し想像し注意し理會し又能く人意の發動を知る者にして此勢力と人身にありて最良の材良たるものなり而して其の開發の形狀により學士ヘブン氏は之を表現力再現力省察力に分ち學士ベイン氏は辨別契合把住の三識に區別せり其働作よ至つては心理書よ讓りて此焉よ論せす

情とは智能の如く道理了悟の性を具有せず唯人心の

物を感覺せられて起る情狀にして乃ち吾人か是に由て快樂若しくは痛苦を覺ゆる所の者なり

意とは事を爲さんとする時特別に進んで決定を實行せるの勢力あり而して此勢力に二種あり乃ち一を靈智より發せるものと一を感情より起るものとせ此等の如きも此焉に論せざるを以て宜く心理書に就而之を見るべし

以上に擧けたる智情意の三種は實に人心を組成する原素にして之を解し易くいはゝ知り感ず擇むと名くる作用をなせり例へば爰に一枚の画あり人之を見て大に其優雅なるを知り歎賞のあまり竟に之を購買せり乃ち其之を知りたるは智なり之を歎賞したるは情なり其購買の行を決したるは意なり此三種の心力は常に吾人の行爲に顯はるゝ者にして古人と雖も又然らざるなし然らば古人と今

人とに其心に於て異なる所なきの是尤も注意を要すべき所にして吾人の考ふる所を以てせば古人は重に情を以て人を導きしも今人は智の一點に向つて教育を施したりこれその大に逕庭ある所以なるか

彼の一瞬千里すべきの瀛車一呼万里すべきの電線怒濤破るべきの瀛船蒼天達せべきの氣球の如き大發明も皆人心の智より出て、たるものあり又彼の臭氣鼻を衝く濁酒を變して芳香心を喜はしむるの美醯とおし雨露霜雪の侵し來る厭ふべき茅屋を化して新鮮空氣の常に通ふ愉快ある家宅と爲したるも皆是れ人心の智より出てたるものなり果して然らは國の文明を進め人の智識を開かしむるは此智能に注意するに若くはなし然り而して我國の現狀を察もれば未た智能を進むる事に注意せざるなり故に我邦人

の如き唯情と意識とに至つては敢て西洋人に及はざるなきも尤も尊ぶべき智能の點に至つては之に數等を讓らざるを得ざるなり是則ち妄誕虛說の盛に行はるゝ所以にして人々久しく未開の蠻域に安んずる所以か嗚呼我邦の文明を來し進歩を謀らんを欲せは宜しく先づ人の智能を開くを勉めさるべからす

第四章　物我

余は前章の終りに於て我國の文明を進め開化を謀るは智識を進むるにありと云へり而して其智識を進めんとするには須らく先つ物我の辨を明かにせざるべからす苟も物我の辨を明にせんとするには勢ひ理化學の力に藉らざるべからず既に理化學にして其の功用を明かにせば又此世に奇怪不思議なるものあるなし隨而虛誕妄說の行はるゝなしとなるなし

何をか物我と云ふ哉俗に所謂物と我心と云ふことなり而して心ハ素と無形にして物は有形なり有形のことゝ能く證明し得べきも無形の事ハ容易に說明し易からも是を以て西洋諸國に於ても之に就て種々の議論の行はれたることあり然るに我國に於ては數百年より常に孔孟の道德論に惑溺せしを以て又此區別をなすものあらも加ふるに古來の俗說に慣れ或は狐狸幽靈の奇に怖れ或は神社佛閣の靈を信し未た嘗て理化學の功用を知るものなふざりしなり是則ち智識の開發せざるによると雖も然れとも物我の別を明かにせさるを以てなり

抑理化學の道理を以て天下の事物を推論せば決して不思議なることなるなし例へは今一杯の水を茶碗に置き之

を無きに至ふしむと云へば不思議の如くなれども之にも無きよ至ふしむるの源因あり乃ち之を洩し或は蒸發せしめ或は又呑ミ盡すれ方法是れなり苟も此源因にして已に明なれば其話を聞くも決て不思議の事なふざるべし或は又爰に麥を出し之を鷄と變せしむるとの或は石油を化せしむるとか云はゞ甚た不思議ならん然れと若し其源因を聞き麥を賣り其代價を以て雞を買ひ或は又石油を買ふなりと知らば是又決して不思議の事よあらざるべし大凡天下の事物皆此の如く一として其源因ならざるはあし故に能く結果を遡りて源因を推せば天下の内豈ふ又不思議あるものならんや既よ不思議なるものあらざれば是れ即ち右の所謂神あきなり然れども強て神なりとすれば已の精神を以て神となすべし我は行かんと欲する所に行き我の止まらんと欲する所に止まる豈よ不思議ならずや我れ食はんと欲する者を食ひ食はんと欲せざる者を食はず豈に亦不思議ならずや是を之れ察せず妄りに神れ身體ありて人の如く奔走し而して其靈昭昭たるものと妄信す豈よ誤らずや又彼の佛氏の所謂地獄極樂の說は既よ第二章に述べたるが如く全く釋迦の方便に出てたるものなり然れども强而地獄極樂なりとせゞ地下幾萬里の黃泉の下ふ有るよあらずして實に吾人の生活する現世界よあるを知るべし奇寒膠を折き北風銅を裂くの嚴寒縷縷僅よ身を覆ひ妻子常よ飢よ泣く而して顧れば債鬼門に充つ豈に地獄よあらずや黃兒既に歌ひ梅蕾漸く綻ぶ此時に當り花下に麥酒を嘗め童子五六輩莞爾として傍よ戲むる豈に極樂よあらずや是を之れ察せず死して而して後焰魔の廳よ裁判を受

け或は極樂ゑ往き或は地獄ゑ陷るゝと豈に誤らずや

要するに神體の有無地獄極樂の如何は物我れ辨を明かにして而して後知るべき事にして敎育に從事する者の既ゑ知悉せる所なるべし而して余は固より敎育の普及を望む者なり苟も敎育の普及を望まば須く先つ民間に行とゝ俗說を辨明するを以て最大急務とあさゝるを得ず是れ第一章ゑ論じたる所ゑして余れ此書を著述するの止むを得ざる所以なり然り而して今此總論を終るに臨み其大要を摘言せゞ我邦は氣候上と地質上との關係より自然奇怪に富み妖術ゑ饒かゝる事世界無比の地なり而して此奇怪幻魔の俗說を防ぐは神佛の迷霧を破り理化學の証明を得て天下ゑ現とる百般の事實を辨解すべしと云ふの意なり是れより進んで本論乃ち不思議の辨妄をなさん

第二篇　變地

第一章　常陸の應答池

附人聲を以て洪水を追ふを論ず

夫れ池湖の深ゝ者水身肥にして其底測るへからず唯蓄然として其面の青きを視るのみ故ゑ少しく奇狀あれば之を窮むるに先だち龍神棲むと爲ゑ辨天息ふと爲す是に於てか世間奇池奇湖と稱する者甚だ多し而して其尤も廣く人口ゑ膾炙する者常陸の應答池に如くゝあし人若し其池汀ゑ立て「チヽイ」と呼ぶ時ゝ遙ゑ池中ゑ於ても必ふず顆々と泡の湧き出るあり斯く聲を以て呼へば泡を以て答ふるより之を應答の池と名けさり

抑も宇宙間の事物一どして其據る所なきはあし故に苟も變態奇狀のあれゞ必らず其據る所を考ひざるべからず

然るに直に之を神佛の靈能に歸し或は附會の說を唱て之を妄信もるは我邦人の俗習にして實に嘆もべき事ありとす今此應答池に就ても斯く奇狀を見るより之を究むるとなく池中に於て大蛇棲息し以て返辭を爲す者なりとす豈に愚ならずや然らば其據る所は果て如何請ふ之を左に陳せん

夫れ此應答池と其周圍悉く七八尺の土棚を成せり其土棚の上に於ては樹木著著として繁茂し又他の池周と異なる所なし然りと雖も此土棚の下は一面の湮池なり故に人ゐ土棚の上に登り「オーイ」と呼ふ時ハ我れ知らず力を足に增さざるへからず其力にて土棚の下の湮土を押も押されし湮土は又先へ逃れて池中ゐて顆々と泡の湧き出るなり依て二人にても十人にても呼ひた人の數だけ泡の湧き出るは實に當然の理なれて奇妙にもあらざるなり不思議にもあらざるなり此の理と同じくして世人の誤信する者あり人聲を以て洪水を追ふの一事是なゐ請ふ之を左に演へん

天保年間洪水あり山城の淀川大に荒れ波浪騰躍奔放馳騁橋梁を毀ち堤防を決もる其數知るべかゝず攝津東成郡の人其自己の堤を防がんが爲め馳せ集りれる者大凡二三千人列を正たて河の東堤に登り鐘を打ち大鼓を鳴し放聲喧囂其聲のに大して烈しき殆んと山を拔かんとす西成郡の人相笑て曰く人聲を以て洪水を追はんと欲する到底能はざるなりと然るに不思議なるのな其水逃れて西堤を破り東成郡の人を去て大に安堵せしめたり是に於てか皆怪んで天神の加護と爲す者あり或は別に附會の俗說を唱へ竟に

一人の其理を究むる者なし」

偖此淀川の堤は何故に西に破れしか何故に東を全ふせしか又何故に前段の應苔池と其歸を同ふするかを考ふる實に易易なるべし何となれば人の大聲を發するや必ちず知らず識らず力を足に入れて其身の重量を增す者なり即ち一人の目方をして平均十五貫目とおすも大音を發し高聲を放つ時は必ちず地を踏み滿むると大凡二三十貫目なるべし此二三十貫目の二三千人も堤に在りて時時大聲を發し高音を放つときは堤の堅固なると實に測るべからざるにあらずや然るに西岸の堤は一人の防ぐ者なし是に於てか若し蜂巣蟻穴の空處あれば直ち崩れ水之に決し終に其堤を破り東岸の堤をして獨堅固の名を恣まませしめたるなり豈又奇妙となすに足らんや不思議となすに足らんや

道理の外に道理なしと誠に金言なるかな

第二章　四國の奇岩石　信濃の古佛像　附高山に貝殼ありを論ず

凡そ一を知りて二を知り二を知りて三を知るは物の順序なり吾人は今四國の奇岩石信州の古佛像を說かんとするに先だち須らく高山に貝殼ありを辨せざるべからず何となれば已に之を明らかにすれば前者を解釋する甚だ容易なるを以てなり所謂物の順序なりと信ずればなり

武藏國秩父郡の山中より貝殼を拾ひたりとて土人の大に不思議に思ひ意せし事は實に明治十一年頃の事なりき之と同じく飛彈及び信濃の山中より往々貝殼を見出そとありといふ就中奥州末の松山は海岸を去る數十里にして又頗る高山なれども山上は一面に貝殼にして人をして最も

怪ましむるに足る故よ高山の貝殼をだに云はゞ必ちず第一の證據として人の言ひ囃す所となれり斯く山上よ貝殼の存在するは如何なる道理に依るか世人不思議の思をなす亦其の謂れおきよあちざるあり

蓋し道理を以て推せゞ此世界も人と同じく一世一世と變化する者なり例へば人の呼吸生息もるは恰も日往き月來り四季の變遷あるが如く遂に人の死去するは猶ほ千萬年を經て此世界の消滅するに譬ふべし又理學上より論ずるも此世界の竟に消滅せざるべからざる既よ已に學者の免す所なり

或人曰く人は一晝夜ゐ一萬三千三百三十四度の呼吸を爲し此中に寢るとあり起るとあり而して概ね八十歳にして沒す故よ人の一生は四十萬度餘の呼吸を爲すものあり

之と同じく天地も一萬三千三百三十四年を以て一晝夜をなし此中に寢るとあり起るとなり以て此世界の變遷を爲せり然り而して人の寢る時には體內の水氣總身に發し其體熱は減殺せらる猶ほ造化の力に依り海水の天地に充るが如し又人の起たる時よは其體熱總身よ發し水氣は悉く体內に藏る猶ほ造化の力に依り天地に充ちたる海水の退きしが如ち然らば天地の一晝夜たる一萬三千三百三十四年の中には潮水の大地よ充ち山山潮水中よ沈むとなるべからず是の時に當り皆貝を留め又人畜を養ふなし所謂世界の寢たる時あり又其水去り山山顯はれ今日の如き現象をなし人畜の生活するとあり所謂世界の起し時なり斯の如く天地人の三体にて寢起の區別を同ふするは蔽ふべからざるの事實なり最も海水北に溢れ山山沈む時ハ南方

の地は干潮よりして山山顯われ世界開けて方に萬物生育す

是よ依て之を觀れば今我地球と赤道より以北よ干潮よし

て亞細亞亞非利加歐羅巴等大陸多きも數千年の後滿潮と

なり赤道以南に大陸の噴起するやも測るべからずと

以上の說は悉く信ずるよ足らざれども今世界と前世界

の區別を考ふるに大に參考となすべき者あり何なれば人

身の生息は主をして水火の作用にして此世界の變遷も亦

專ら水火の作用ゐ依れゞなり

考古學者の說を聽に桑田變じて海となり松柏摧けて薪

となるとは能く此世界の變遷を狀したる諺あり故に今末

の松山の如く高山より出る貝殼を採り其形物質等を吟味

すれゞ全く今の貝殼と異ある者なり是よ於て高山に貝殼

は今世界の貝殼よあらずして前世界貝殼といふ者甚だ多

し加之貝殼は單に山頂に在るのみならず地質學者の調ぶ

る所に依るに山間或は原野の少しも海中よ緣由なき地中

より堀り出す事多し然らば地震或は人工により世界に於

て山頂に噴上せられたる貝殼もあるべけれども之を概評

して前世界の貝殼とおもを得べし

此事たる獨り考古學者の推測のミならず歷史上よ於て

其變遷を考ふるも大に然るを見るなり西洋古史の基礎な

る摩西の遺書に依れゞ今より四千餘年以前に大洪水あり

ノアの一族纔かよ免かるゝを得たりと云ひ印度の古書に

も亦さ大洪水の說ありと云ひ又支那に於ても堯世の洪水

と或は是を同時なりと云ふ

我邦の如き開闢以來未だ四千年に滿さざれば嘗て大洪

水ありしや否やを知らず然れども大古は此世界を以て混

沌たる泥海となし諸冊二尊鶏鳥を以て地の剛柔を試みられしとは普く人の信する所なり是よ依て之を觀れば此世界は火水の爲よ古を今と大に變遷しさると明かなり其變遷するよ當り陸地海中よ突然噴起して貝殼を其土よ殘せるもあるべく或は海水地面に溢れ所謂洪水山を包み蕩蕩として貝を生せる事もあるべし則ち山上に其存在する所以なり是を之れ察せず高山よ貝殼あるを視て山中海神の棲むよ依ると云ひ或は天狗の仕業となすか如き豈に笑ふべきよあらずや

若し夫れ奥州の埋木九州の石炭北越の草生津の油の如き最も好き証左よして皆之れ前世界の樹木地中よ埋れて然る者あり然れとも是等のとは別に學ぶべき道あるを以て之を略し進んで四國の奇岩石信州苅谷峠の佛像の圖を

説明せんとす

四國よ奇岩あり高き湛山の中腹よ聳り其面平かにして恰も横額の如く此石ゟ人物の像を画く其形惣髪にして長神ある衣服を着何れの時代の人物なりや明のならず或は曰く前世界の人像なりと加之險峻峻壁恰も屏風を立てさる如き崕山にして鳥禽と雖も容易に至る能はざる所なり然るよ一目瞭然其人工たるを知る豈に奇ならずや又信州苅谷峠に之と齎しき絶壁に觀音勢至を始め種種の佛像を彫刻せり是に於てが両者をも種々の俗説行はれ一般に神なり雲よ乘て此圖を畫けりと思意せる者の如し然れども所謂神なる者能く繪畫を圖し或は佛像を迎ぶべきや妄誕も甚い哉然ちば何故よ此高崕峻壁の岩石に人物を彫刻せるや顧ふに是れ前世界の遺物に非れい則ち嘗て斯の如く

儉峻なる岩石に非さりし者か或ハ又地熱卽ち地震の爲に其岩石を噴出したるか何にしても水火の作用に依り桑田變てし海となり松柏摧けて薪となる諺に合へる變遷なり」

第三章　琵琶湖の箕火

近江の琵琶湖に不思議の火ありと之古老に聞きたるとにして吾人は未だ實際ゑ之を見ざるなり偖も五月頃霖雨濛濛咫尺も辨ずる能ハざる暗夜ゑ當り湖水を往來する舟夫の箕ゑ殆んと螢火と如く點點たる光を放ち之を徐ろに脫ゐ置けバ自然と其光を消失すべきも若し狼狽ゑて其火を拂へば又微塵に碎けて更に億万の火となり再び如何ともせべからざるゑ至る尤も此火は一種の瓦斯体なれバ未だ物を燒くの力ゑし卽ち所謂琵琶の箕火なる者是なり而世の傳ふる所を聞けバ曰く此箕火ハ往古より湖水ゑて溺死せし人の怨靈火なりと然れども世に所謂怨靈火なる者ありや吾人は斷ゑて其あらざるを知るなり然らバ如何ー

熟聞きたる儘此箕火ゑる者を考ふるに全く地氣の作用に外ならず卽ち地中の熱氣空中ゑ蒸昇せんと欲するに逢日の雨天にて蒸暑の氣候に覆はれ地上に少しづつ發すに可燃性の瓦斯体と相觸れ遂に此光を生ずるのみ例へば猶ほ燐素の空中にて燃るか如し然るに若し氣候の都合ゑより風ある時ゑは其氣を吹き拂ふべけれども近江の國たる四方皆山ゑて一体風少ー加之空氣溫靜少しも風なき時ゑり是時ゑ當り勇壯血氣ゑ乘する舟夫等の奮勵して進む勢に空中の可燃性更に熱を增ゑ遂に微塵の火とゑるとゑり是に於てゑ竟に所謂箕火を製出すべし

右の如く發火の起る源因を考ふれば第一地氣の强弱第二小雨の降り方第三船は槽き方此三調子の宜しきを得て然る後に顯はるゝ者なり然れとも此三調悉く其宜しきを得るは誠に稀なる者ありとす故ゑ五月の間と雖も毎夜發火の顯はるゝもあらざるあり然り而して其徐ろゑ發を脱ぎ置のば何故に消滅するやと問ふに發の人身ゑ在るに當ては其体熱に因り決して消ゆるとあし然れとも若し其發を脱きて他處ゑ置けば竟に冷ゐて自ら消滅すべき理なり又若周章て發を拂ひは數萬に碎けて發に附くゝ乃ち發に人の暖氣を含むを以てなり此故に一旦發に附ゐ發火も れば之を脱がされゞ彌益廣がりて其火の消ゆるとなし偖此事は獨り琵琶湖のみに去て他に其例なきは全く地理ゑ因るゑ非すして何ぞや然るゑ之を認めて幽靈火となすは眞に野蠻時代の遺說のみ

尙一等を進めて講究すゑきゝ墓地或ゝ田澤に於て暗青色の炎を揚け忽ち燃い忽ち消て人々をして狐火或は鬼火と稱導せしむるの火是あり元來此鬼火なる者と發火と同しく源因有つて然るあり只其源因に至つては發火と同しからざる者あり所謂狐火なる者ゝ狐の食物に依り腹中より燐素を噴出し空氣と化合去て發火する者あり所謂鬼火なる者は嘗て理沒せる人体の地中に腐敗して其燐素を次第に地上に蒸發ー風靜かに雨細く彼の五六月の頃鮒候の爲めに蒸されて遂に暗青色の炎を揚くる者なり是等の事は尙論辨をへき事多しと雖專門なる理學科に讓り茲には其事一斑を擧けたり

第五章　筑紫の不知火

不知火は一種金閃を放つ小虫相集り此に奇觀を爲すと
い近來諸學士の一般に承認せらるゝ所なり然れとも又前章
既に述へさるか如く溫泉と等しき道理にして地中より溫
氣の蒸發するより生ずる者なしとせす而して地質により
或は發せざる所あり故に我邦にても溫泉の噴出する所多
しと雖も悉く發して火となる者にあらず是れ已に地質を
修先たる者の了知せらるゝ所にして或は又海中に於て此
地熱を噴出する所あり即ち彼の肥前肥後の如き方に其
線に當れり」

蓋し今の肥前肥後の地方は古昔よりして溫泉多き處に
して始めい之を火の國と云へり其後數十百年を經て穀物
能く稔り菜の如き最も繁茂し隨つて國名は一字を以て稱
號せるとなりたるを以て今の肥前肥後に區別せり

抑も地質の如きは地味に因りて同じきを得ず肥前肥後
の如きは地味の豐饒なるに因り他地方にては硫黃或は他
の礦物とあるべき地氣も蒸發して一種の瓦斯体となり燃
ることあり所謂筑紫の不知火なる者幾何か此關係なしと
せす

何を以て之を不知火と云ふや蓋し六七月の頃氣候の蒸
し暑き時風起らず海面殆んと熨すが如きの夜肥前肥後の
海上を一瞥すれば閃爍彼を照らし忽然一火分れて兩火と
なり兩火分れて三四點となり先後現出數里の外に連亘し
明にして燃えんと欲する者幽にして滅せんと欲する者高
き者は翔けるが如く低き者は走るが如く或は雙或は雙或
と合或は離眞に一大美觀あり乃ち其火の在る所に行けば
又消えて視るべからず故に誰なりて其火の起る所と性質

を知る者なし是を以て之を不知火と名けたりと然るに今や學術開け地熱上よりするも小虫上よりするも火の在る所を知りたれは今よりして不知火を改めて明了火とすへきあり

第五章　本所の幽靈橋

吾人の已に屢論じたるが如く我邦の俗習さる幼少より妄誕虚構の俗習に慣れ嘗て學術を以て事物の道理を推すことを知らず徒に佛氏の寓言と附會の俗説とに迷ひ平平凡凡の事にても少しく異狀あれば忽ち其神經を動亂し是も奇あり彼も奇なり奇あり奇ありと妄想して遂に所謂幽靈なる者ありとなすに至れり尤も此幽靈なる者幼少の時より親にも聞き劇場にても見て精神に十二分の恐怖を養成もるを以て智識の開發に防害を與ふると決して俗説の比

あらざるなり

浚ふ寛文の頃世人は喋喋せし本所七不思議の中に幽靈橋なる者あり傳ひいふ此橋に於て嘗て座頭の殺害せられしに原因せりと故に毎夜深更に及び四隣人定り鷄犬聲死もるの後彼の座頭の幽靈怨然此橋を渡るといへり然れども一人の其姿体を見たる者なし唯「ガタ、ガタ」と下駄の足音を聞くのみ是に於てか愚民等嘖嘖措かず遂に幽靈橋と名くるに至れり嗚呼世に所謂蒼顔細腰茫然として白衣を着怨が如く訴ふるが如き幽靈なる者あるか苟も明治の教育を享けたる者其必らずしも之無きを斷言もべし然らば深更此橋上を往復もる者果して何物なるか是實に吾人の左に述べんと欲する所なり

吾人は今尚ほ其幽靈橋の存するあれば直に之を實驗し

て巨細の説明を爲すべき然るに今や其橋なし因て其源因を想像して概略を述ぶべし蓋し此幽靈橋は構造粗悪にして橋下より蒸昇する水蒸氣と其時の氣候の作用により橋板に緩みを生じ或は板薄く不釣合にして橋桁の間に微響を起すとあらん然るに其微響たる白壁は萬却の喧囂なるが爲め聞くを得ざるも四隣寂として人影漸く絶ゆる時い仄かに之を聞くを得べき是に於てか愚人豫期意向を以て之を幽靈の足音となすなり豫期意向とは豫め斯くあるべしと自ら期して其一方に意を注ぐと云ふとして所謂先きの意向によりて生ずるものあり例へば人若き判然明瞭ならざる形色を見るときは或は赤或は青又黄又紫と自ら期する所に依りて異なるべき又若し判然明瞭あらざる聲音を聞くときは之を人語なりと豫期して聞かば人語となり之を鳥音なりと豫期して聞のば鳥音とあるべ一彼の鶴唳を聞て呑喊となし蘆葦を視て伏兵となす皆此豫期意向の然らしむる者なり今之を幽靈橋に應用すれば假令嘗て橋桁の緩み或は板薄くして橋桁の間に微響あるも人之を覺知せず之を覺知するも豫期意向ならざれば之を不問に附せり然るに偶座頭の殺されしを以て忽ち世人の腦隨に幽靈は出でざるか必らず出るあるべしと豫期意向を起も之を以て遂に一層の注意を促がし彼の微響を聞付け遂に幽靈の足音となせしのみ

以上は素より吾人の想像説にして若し之を其實際に就き其橋の構造と又時の氣候と及び水蒸氣の蒸發とに探索を施さじめば必らず明かなる確證を得へし然れども今其何れに存するやを知る能はざるを以て意の如きを得さる

あり

第六章　淺草の姨が池

歴史上より考察を下せども地質上より判斷を試むるも今日の東京淺草觀世音の境内は千歳の往昔は必らず遠淺の海なりし故に淺草海苔淺草漉返し紙等の如き物産の名を殘せり其後星移り物換り此地漸く埋りて一沼池となる乃ち所謂姨が池是なり

姨が池も亦た年經るに隨ひ漸々埋もれて今は妙音院地内に僅僅掌大の水溜りを爲すに過ぎず然れども此水他の沼池と異なり霖雨に際しても増ることなく大旱に遭ふも減ずることなし加之此池に生ずる魚は鮒のみにして其餘の魚は決して生長することなく且つ其鮒も皆片眼にして滿足な両眼の備はれる者なし而して若し人あり両眼の備はりたる鮒を放つも半年位にして一眼に變ずべしと云へり此事獨り姨の池に限るにあらず我邦處處に此例多しと聞く然れども吾人は未だ其實驗を遂げたることなし

先づ其片眼の鮒なる者を説明せんに第一内界より起る源因乃ち見る人の心性上に生ずる者第二外界よりの源因乃ち其魚及び水質の何如に歸すべし吾人は數十の魚を庭池に養ふことあらんに其水質に依て往往盲目の魚を生ずることあるを知れり又其魚に鬪爭に依て或は片眼若しくは無尾の不具者を生ずることあるを知れり乃ち是等は外界の源因にして又疑を容るべからず已に盲目なる者あり無尾なる者あり又片目なる者ありとせば此姨が池に至ることあり人魚の嘘を見る中必ず其片眼なる者を見るならん然れども魚の性たる始終水面に在る者に非ず必ず又深く水心に沒

すべし少暫くにして此の片眼ある者再び浮び出づれば果して如何前に見たる者又之を見て此池中片眼の魚多きよ驚くとならん乃ち之を奇怪視して甲より語を乙より傳ひ漸く廣く世人の知る所となるべし彼の愚民輩は已に之を聞て直ち觀世音れ靈驗ふ歸し充分の信仰心を起して來り見るを以て已に述べたる豫期意向を以て少しく傷きたる者を見ても全く盲目なる者を見ても忽ち片眼者となそならん短刀直入之を言はば信仰心の盛んなるを以て已れが兩眼既ち盲者と同一般なり豈に魚の盲不盲を辨ずるの視力ゆふんや之を內界に起る源因なりとす之より進んで此姨が池には何故ふ獨り鮒のみを生じて他魚を生せざるゆを辨せん

偖他魚の生長せずして獨り鮒のみの生長する源因を考

ふるに別に深遠の理なきを知るなり夫れ地中よりとて燐素といひ窒素といひ曰く何と地質の堅柔と氣候の變遷ふ依りて種々の元素氣の蒸發する所あり而して此元素氣の獨り鮒のみに適して其他に不適當なるを以てならんか而して此氣ハ常に生物をして變化せしむる作用を備ふる者なりと例へバ動植物ふ競爭進化の作用ゆり乃ち其配置の何如に因り或は劣者をして優者となし或は優者をして劣者となるが如く常に此作用を彼の姨が池の水底ふ在て行ふ者なり尙ほ進んで眼を廣く宇宙間ふ放てば婦人にして其擧動全く男子の如く或は男子ふして其性格婦人の如く或は男女同体の變体あきふもあらず然ふバ此姨が池の如き地方に在ては女性をして男性ふ化せしむる事なしとも云ふべからず

今は昔し淺草境内の雌鶏雄鶏に化去たりとて偏に之を觀世音の功德に歸しさる事なり此事直に然り去や否や單に口碑に傳ふるのミなるを以て輙く信じ難しと雖も若し果去て然りし事ありとせゞ動物進化の道理を誤り男女同性の人を生ずるが如く雌鶏をして雄鶏となす事なしとも云ふ可からず尤も已に述べたるが如く古昔より僧侶は巧に人を籠絡するの才なりき故に人を去て雌鶏を納め去め夜中窃に之を雄鶏と取換ゑ以て信者の妄信を深からしめしやも測られず唯現在に之を見るにあらざれば之を辨ずるも其功期し難し

第七章　京都の柊神社

柊明神ハ京都の下加茂に在りて本宮の傍に勸請せる者あり地内丈凡七八間四方にして社内にハ柊樹叢叢林を爲せり俗傳ふ此柊明神ハ尤も深く柊樹を愛す故に願を掛けて其成就したる時は必ず謝禮として此柊樹を献納すべく又其願の成就もるや否やを豫め見んと欲せば先づ其柊樹によあらざる諸木を此社内に植にて以て之をト知すべし若し其植にたる木の柊に化する者は必ちず大願成就の前兆にして然ふざる者は願ひ叶はざるの徴候なりと

此説古昔よりして愚民の間に勢力を逞ふしたる者にして人の尊崇を増すの標準となれり故に今其社内を見るに献木は甚だ夥しく就中他木の柊樹に化せんとする者ありて中にも鼠の木、青木、木犀等は柊に化すると尤も早き者にして葉の將に化せんとする者あり或ハ既に幹迄柊に化成したる者あり又或ハ樹幹は南天にして其葉全く柊となれる者あり勿論此事ハ柊神社の社内にして其社外の地にかゝる

奇狀の顯るゝ事なし是則ち俗説の勢力を逞ふし人の以て不思議と思意せしものならんの偖何故に種々の樹木の柊に化もるや何故に柊に化せざるべからざるや又何故に此地と限りて此奇あるや實に不思議なりと云ふべし然りと雖も爰に此地に限り他木を植るも柊と化すべきの道理なり請ふ怪むを止めよ既に前章と述べさるが如く地質の堅柔と氣候の變遷に依り種々の元素氣を蒸發もる者あり此蒸發する元素氣の如何に依りて生長する者と生長せざる者との區別あり乃ち前章の姨が池の如く魚にも鮒のみと して鳥には鷄の雌をして雄たらしむる者なり此事實あそ移して以て柊神社の奇蹟を顯開するの好斧鉞とあもを得べき乃ち此加茂明神の社地は獨り柊樹とのみ適當したる元素氣を地中より蒸發もる者にして猶ほ姨が池も唯と鮒のみ適するが如く其異なるとたる樹木の柊に化もるゝ猶ほ又姨が池に於て雌鷄の雄鷄に化するに同じ豈と奇とし て喋喋するあ足らんや之れと同しく羽前國米澤とては柚樹を植ゆるも三年の後必らす枳樹ゝ化するを見るなり故に此地にゝ柚樹を仕立てる事能はも

第八章　奈良の二日堂

吾人の鄕里なる高麗川の中に水流緩漫涵碧沈鬱其深さ測ると知るべかちざる所あり稱して瀧が淵といふ此處には往古より百千の河童群を爲し中にも今朝坊とて年を經た親分ありて皆其命令に從へり而して其河童皆正直にして人を恤むの情あり就中貧困の者にゝ器具を貸し衣服を調ひ誠と不思儀の事多し嘗て近村の者婚姻を行はんと欲せしが祝儀の日に臨み急に膳椀に不足を生じ大と差支を爲

しさり即ち馳せて瀧が淵に至り「膳椀十人前何卒れ貸し下され」と呼ひしに奇なる哉淵中より同色の膳椀十人前程流れ出でたり是に於てか皆以謂らく此膳椀は龍宮にて用ひらるゝ者なるに仁慈なる今朝坊が貸したるなりと

以上は吾人が幼稚の時鄉里の古老より聞きたる所にして密に此一事に止ふず此今朝坊に就ては附會の說甚だ少なからず想ふよ天下の廣況斯の如き妄誕尙は極めて多ゐるべし偖世人の嘖嘖する所の龍宮なる者は何ぞや吾人は甚だ領解に苦しむあり果して龍宮なりとせんか地下幾尋の底にして何如なる風俗を爲すや此地球の圓形なると地中には數層の地質を經て其下には一大熱点なるとを知ふば又所謂龍宮ありとい曰べからず然るを況んや今朝坊の如き一の水中動物に過ぎざる者に於てをや又況んや想像して

名稱を下したる虛像物に於てをや假令千百群を爲すも膳椀の備はるべき理あふんや然れとも實際婚姻の時膳椀の流れ來りし者ならば好事者の所爲に出る者なると又疑を容るべからざるなり

爰に瀧か淵と同じく龍宮の作用ありとて普く人口に膾炙したる井あり即ち大和國奈良の二日堂の井及び京都祇園社の井是なり聞く二日堂の井ゐ盃を落せバ其落えたる盃二日を經て若狹國小濱の井に出づと又京都ハ祇園社の井よ盃を落せば四條新町の井に出づと其說く所を聞くに曰く此地皆龍宮よ通じ河童の作用を以て他よ流出するなりと

按ずるよ奈良二日堂の井も京都祇園社の井も地質學よて判斷する時は決して疑ふべき所なき想ふよ世人は河と

いふ者ハ唯陸地上にのみ流るゝ者と思意するなちんが少しく地質學を修むる時は海中は勿論地下數十尋の下迄も陸地上の川と同玄く廣大なる水の流るゝ者なるを知得すべし就中樹木の鬱蒼たる山嶽の地中ハ必ちず一大河の流通そる者なり是れ則ち山嶽の樹木の吸収せる水と雨水溪間等の湧出水とを集合して然る者ハして今二日堂の井及び祇園社の井の如きは偶地中の大河に當れり而して其水一は若狭の小濱ハ通じて一は四條の新町に通ずるなり故に人ゐり盃を投ずれは小濱と四條新町とに出るのみ決して疑ふべきハあらざるなり畢竟俗人の所謂不思議あるとを主張するは未だ愚昧の甚しき者にして自身の禽獸を去る甚だ遠からざる者あれべ苟も不思議に思意すべたとゐふば早く起然として禽獸界を脱れ此理學を修めよ必ち

ず文明の人となり發明する所尠少ならざるべし

第九章　勢田の龍宮穴

龍宮のことゝ既に前章に述べさるが如く世人の妄想ハ出でたる空論にして信するハ足らざるあり然らべ勢田唐橋の下ハ龍宮に届く穴ありといふも亦た信ずるハ足らざるを明かあり然れとも一種異なりたる水流なれは其據る所を考ひ之を辨明せるあ必ふず無用あらざるべし蓋し此勢田唐橋の下に周り十丈計り水窪くして渦を巻き落々として水を吸ひ込む所あり故ハ俗人之を見て其所以を知る能はず直に此水は龍宮に届く者あゞと想像したるのみ

按するに此渦巻は前章の奈良二日堂の井若州小濱の井に通ずるが如く此川にも地中を通ずる水道あるなり聞く淀川には天満の迎ひ潮とて常水の外更ハ急ハ水量を増ま

所ありと想ふは勢田唐橋の下より地中を潛りて天滿に至り急に淀川に流れ出るなちん此事獨り陸地に於てのみなちず海中に於ても亦た之れあり即ち彼の世人の稱導する阿波の鳴門は其適例なり

抑も鳴門は南一面に大海にして北内海の潮流に接し東西より常に潮流の交通もるを以て相激合して正に潮水を渦巻き加之海岸は岩石遠く相突出し地形上より玄て潮水を彼方此方に激せしめ勢ひ輪を爲し渦を巻く者あり而して其巻きさる水れ唐橋の下より地中に潛むが如く他の海中に潛流すべし然るに俗人之を知らず阿波の鳴門も海中の龍宮に屆く潮水を吸ひ込むなりとす豈に誤らずや此誤りよりして却て世人を迷ひの穴に引込むと實に嘆ずべきの至りなりとす

蓋し世人は川と玄いへば必らず陸地にのみ流るる者となすべけれども前既に述べたるが如く地中を流るる者あり又海中を流るる者あり尤も其海中を流るる者は潮水にして幅廣く流强く決して陸地の川を以て推測もべきにあらず近くは之を四大洋流より區別し既に人の知る所なるを以て之を贅せず唯少しく爰に述へんと欲する者は彼の遠州灘の沖に幅六十里其流れ極めて强く舟行甚た危險なる急流あり即ち八丈島より小笠原島に通ずる道線に當り其形狀に依り黑瀨川と名く即ち洋流の一部分なり是に依て之を觀れば海となく陸となく其源因ふく玄て行ハるる者あらざるなり

第十章　江戸の星移井

星移の井とて白昼星の井中に映ずる者あり就中舊江戸

淺草の星移井の如きは尤も能く人口に膾炙したる者あり此井素小出侯の中屋敷に當り近く天保の頃同侯の鼠山に轉居せられしより俳優の徒之を得て遂に劇場を設く今の市村座は乃ち其星移井の跡なりと云ふ抑も此星移井は關東舊蹟の一にして往古此井より清水の大川に流れ落つるあり而して其水清冽潔にして大川にありて一際目立つて流れたり故に之を澄廉川と名けしも其後今の隅田川に改めたるなり斯かる名所なるに忽ち變じて劇場となし吾人をして今日之を見るを得せしめざるは尤も惜むべきにあらずや此外相摸國愛甲郡星井村の星移井及ひ鎌倉名所の星移井の如き亦た世人の喋喋する者あり偖何故に白晝星の井中に映ずる者あるか是實に一の疑問たるべし古人は之を以て龍宮の乙姫の眼なりと云ひ或は又地氣の作用と云へり是皆取るに足らざる俗説なるのみ故に直に海蛙井底の寢言と言ふべきなり

世人は白晝天際を仰げば太陽の外別に星なりとも思はざるべし然れども實際は白晝と雖も夜間と同じく滿天に列張して居る者にして唯太陽の赫灼たる光に奪はれて吾人の眼に入らざるのみ故に極めて精透なる望遠鏡を以て之を窺ふ時は歴々として見るを得べし今星移井は水底清純にして鏡の如し而して周圍に樹木あり井中をして少なく暗澹ならしむ此時に當り氣清く風靜なれば日中と雖も星をして井水に映せしむるの理なきにあらず今純粋なる清水を極めて清潔なる器に盛り程能き木蔭に置く時は枝葉の間より星をして器中の水に映せしむる事ありと云ふ尤も其純粋なる水と木蔭の程能きを得るは容易に能はざ

る者なれども天下の廣き殆んと之に適するの地なしと云ふべからず彼の淺草及び鎌倉の如き其地なるべきか

一歩を進めて之を考ふれば何故に斯く一地方に限りて純粹の水を湧出するの是少しく疑を容るべき所なり然れども少しく地質學を修めたる者は地層の何如に依り此の如き純水を湧出する所あるを知る可きなり大凡水の地中に流るるや或は鑛金質に所に往き或は苦土質の地に流れ忽ちにして鹽類を含ミ忽ちにして硫素を吸ひ曰く「アンモニア」曰く亞硝酸を流るる水にして純眞なる者甚だ稀なり然れども地面の廣き水脈の多き或は此混合を受ざる者あり即ち星移井の千の如き是なり尚委細を知らんと欲せば地質學を見るべし

或人曰く古來僧侶なる者と極めて愚民を惑すの才に富み且つ常に其身の閑なるを以て左思右考其術を研究する以て遂に此星移井に如ける者を案出し豫め星に似たる物體を井中に置き強て附する此名を以てし遂に衆人をして理會に苦しめ佛靈の昭々たるを示し已れが囊中を温決まらんと吾人は始め此説を信ぜざりしが今春相甲の間に遊び鎌倉に至り星井村に行き所謂星移井なる者を見る然れども今や佛靈の衰微したるに依るが其實なかるき吾人は是に於てか所謂果して天際の星の其井に映ずる者ならば今日に於ても之を見るを得べきも已に其實なきを考ふれば或は或人の説の正確なる者か然れども淺草の星移井の如きい今や其所在を失す實驗せんと欲するも豈得べけんや故に輕卒に斷言を下す能はざるなり

第十一章　八幡の八幡不知

附古井或た穴藏はて俄に人の氣絶する事
佛龕神宇を開き眼の潰るゝ事

俗傳ふ下總國八幡村の八幡不知と實は妖怪測るべからざる竹林にして一たゞび此に入て再さび出で來りし者なし嘗て一疾公あり其奇怪を信せず飽までも其由來を探らんと欲し一日爰に入りたるとあり漸く歩を進むれば川ありし流る其音潺々以て耳を洗ふべく其水玲瓏以て底を見るべし忽ちにして向岸より緣髮を垂れ紅袴を穿ち容姿嬋娟衣香蘭の如き一人の官女出で來り此河を越して決して内に入るべかゝらずと堅く諾して立去れり疾奇異の思をなし遂に遠く瞥見すれば眼眸の極まる處一宮殿あり其殿前人骨壘壘推を爲し殆んど山の如きを以て疾大に驚き以謂ふく是全く往古より此穴に入りし者の魔王に虐殺せられし人骨なり宜なる哉一たび入て遂に出る能はざるやと兢兢と

して遁れ歸れりと

右は全く愚民の信奉する俗說よして取るに足らず然れども未る人智之れ進まず理學之れ開けざるの幕府の野蠻時代よ在ては甚だ不思議の事實に去て種種の疑を起せしも其謂はれ無きにあらす然とも開明の今日に及び尙其奇を唱ふ豈誤らもや嘗て其地形を聞きしに往還に浴へたる竹藪よして周圍は僅に六七十間に過ぎず而して此邊は田野遠く開開たる處なるを以て明かよ見通し得べき一竹藪たるのを然るに前已に述べたるの如く此竹藪よ入りたる者の歸り來るなきより八幡村に生れて此藪を知らずと爲し遂に八幡の八幡不知と名けしありと

苟も化學を修むる者は曰く窒素曰く碧石曰く炭酸曰く何曰く何と眼以て其毒を見るべかゝざる者よりて能く人

畜を斃すに足る者甚だ多きを知るなちん彼の、有名なる那須野れ殺生石の如き出雲伊彌坂の穴の如き高野の玉川の如き皆是等毒物の作用ふ出でゝ去事已に世人の認知もる所となれり然ふゝ此八幡の八幡不知も必らず其類ゑーて決して彼の俗説に謂ふ所の魔王なる者ありて此處に住み來りし人を虐殺するゑあらさるなり

近くは古井若くは閉込めたる土藏に入らんとして急に呼吸を閉塞する者ゐり眼眩し體倒れ遂ゑ其儘にして斃死する者往々ゑして之れあり斯の如きは全く井中若くは土藏の中に窒塞せる窒素の作用に去て又魔王ゐる者ゐりて爾するに非らず尚一歩を進めて之を論すれは世人の噴々措かす彼の神佛の靈德なりとして稱導する藥師或は不動尊等の龕宇を猥りに開排すれは忽ち眼潰れ体倒るゝ者ゐり、と云ふの如ひ全く之れなきに非らす而して其實は龕内に窒塞せる窒素或は他の有毒瓦斯れ作用にして決して神佛に靈德ありて然るにあらさるなり之に依て之を見れと八幡の藪林ゑ有毒瓦斯の鬱積もるゐり爲ゑ人命を損する者たる事知るへきのみ加之此竹藪に磐石の存在するが如きあれゝ人の此處ふ入る者再び歸らさるも怪むゑ足らざるなり

第三篇　奇物

第一章　太宰府の飛梅

世ゑ天神樣と崇め奉るは彼の藤原時平の讒ゑ依りて筑紫の太宰府に左遷せられたる菅原道眞の事なり道眞性梅を愛し其高辻の庭前には梅樹常に林をゐせり然るに一朝太宰府に配流せちるゝや又之を見る能はす乃ち怏々と去

て獨り暗室に閉居し樂むとなかりき偶然紅梅あり京師より太宰府ふ至る大凡そ三百里の空中を飛ひ來り大に道眞の心を慰めたり故に太宰府天神の飛梅とて大に人口に膾炙し是より去て道眞の畫像及び祠廟なとには必らず梅を備ふる事といあれりと

是れ古來より傳ふる俗說にして三百里の空中を飛び來りしとい信ずるに足らず然れとも其飛梅と名くるい決して其謂はれなきに非ざるなり初め道眞筑紫ふ遷さるゝや勅使其高辻の館に下向し以て勅命を傳ふ實ふ延喜元年正月廿五日なり（天神祭の必ず正月廿五日あるは是に起因せり）其後二月朔遷與筑紫ふ發ず發するに先ち庭前の紅梅半綻び其美いふべからず道眞乃ち「東風吹けば匂ひこせよ梅の花主なしとて春な忘れそ」と一首の歌を殘せ

是より先き伊勢度會の社人に七旬餘の老人あり白大夫と曰ふ嘗て道眞の愛顧を受く今や其太宰府に配流せらるると聞き驚嘆措かず乃ち夜を以て日に繼き京師迄往きたるふ道眞既に發せられ後なり白太夫悲嘆止ゑ難く直に起て醍醐天皇に謁し奏して曰く聞く諸國に關門を設け人の道眞ふ通ずるを禁ずと然れとも臣と神職なり乃ち神社拜禮の姿となり以て筑紫ふ至り管公に面せん陛下管公に詔勅ならば臣ふ命じて傳へしめよと天皇大に喜び頓て御消息を白太夫ふ渡し賜へり是ふ於て白太夫は御暇を告げ奉らんとせしに御簾中ふ彼の道眞の名殘りに詠せられたる歌を出して示されたり白太夫之を見て轉た悲哀の情に堪へず直に庭前に下り數多の紅梅を見廻ゑ遂に其一を根分して恰も人ふ接するの如く白して曰く爾非情と雖も

公の寵愛せゞが是を感よりたて筑紫に繁茂せよと利ち烏帽子を被り水干衣を着し袴の裾に藁の脚半當て以て二尺許りは杖の如く三尺許りは空に出て二重腰になりて出立せり故に其進む所は狀恰も杖の歩行するよ似さ𪜈斯の如くにして峨峨たる峻嶺を超へ漫々たる海波を過き三百里をゆかんは實に思ひも寄らざるとなれとも此場合ふては白太夫の行くよおちずして誠といふ一心込たる志の行く義なれば其誠豈に貫かずして止む者ならんや既に此誠あり故に千歳の今日に至り數千座の天滿宮傍よは必ちず又此白太夫の祠を置けり

斯く白太夫は三百餘里の長途を經て遂に太宰府よ着れ配所の御館に至り道眞に面し主上の消息を捧げ且つ楮餘の細説を述べ漸にして紅梅を出し謂て曰く是れ則ち嘗て公の愛寵せられたる紅梅なり愚者高詠を讀み今日よ於ても公の懐に忘るる能はざるを知る乃ち根分けして持參せりと再び其梅に語て曰く爾も亦た公の恩顧を遺れさるか三百里の長途經來て毫も憔悴の色なしと之を進ぜければ道眞主上の厚意に感じ白太夫の誠心よ驚き泫然として巾を沾はされたり其後漸く繁茂して大よ道眞の憂情を慰め其薨後益榮へ千歳の今日其廟後に繁榮する者は實に其遺孽なりと云ふ

偖何故に彼の梅を飛梅と名けしやと云ふよ當時時平の道眞を恐るる雀の驚に於けるも啻ならず而して既よ之を筑紫に配流せし後も常に已れの讒謀の暴露せんとを危ぶみ諸國に關門を設け人々の交通は勿論書翰の往復をも嚴しく吟味するとはなれり斯の如き場合あれば迚も京都

が紅梅を取寄せたりと云ふを得ず暫く名くるに飛梅を以てしたるならんか

以上の説明に依り讀者は其飛梅よ名けし所以を知るならん苟も之を知らば亦た奇として稱導するに足らざるべし然るよ廣く人口膾炙し太宰府の飛梅とたにいはば三尺の童子と雖も之を知らざるなきと何ぞや唯徒に其飛梅なる名稱あるより其深意の存する所あるを知らず全く三百里の空際を飛ひ來りし者となすを以てにあらずや然則大なる誤信と云ふべし

今此章を終るに及び一言もべき者あり夫れ道眞は賢相なり豪傑なり如何よ梅樹を愛するも朝命を以て左迁せらるゝに臨と之に戀々して別を惜む者ならんや然らば彼の一首の和歌は何故よ作りたるか是れ實に吾人の考ふへき所なり蓋し道眞は忠義を以て其心となせり故に紅梅に托して其思想を發せし者あり試に思へ「東風吹けば匂起せよ梅の花」と乃ち京師は筑紫の配所より東に方れるを以て東風吹き到る毎に君の恩惠を思ひ出すに譬へ又主なしと雖も春な忘れそとは已れは流罪の身となり君を失ひたるも決して忠義の心を忘るべからざるを云ふしなり然るに彼の白太夫い唯歌の外面を見て其托意の在る所を覺らず徒に之を携へて筑紫に至りし者い其平生の恩義よ酬へたるは之れあらん然るも道眞の心に至つては未さ盡さゝ所あり世人若し此説を疑いゝ請ふ道眞の重陽よ逢て作られたる捧衣の詩を讀べ

第二章　高砂れ相生松

松にして尤も人口に膾炙せる者い播州高砂相生の松

あり俗傳へ云ふ其樹根は一本にして中程より分れて雌松雄松の二枝となり俱に亭々として高く蒼々として茂り猶は人に於て夫婦の相對するの如し故に祝言よ高砂の松と謡ひ相生の松永く榮ふあるとゝ凡て夫婦の因に引合さるゝなり

偖此高砂の松れ何故に一本にして雌雄の両種と分れたるや是れ實よ不思議とする所なるべき嘗て吾人の未だ之を實見せざるや唯俗傳を標準として想像上より説を爲きたるとなり曰く天下豈に不思議の事物あらんや高砂の松の如きも想ふよ在昔好事者あり植物合接の理を知り雌松と雄松の嫩苗を取り互よ其一片を扮き抱き合して堅く之を縛り植ゑし者久きを瀰て竟よ枯れず漸く成長して相生の姿をあせり乃ち人工相生の松といふべくして決して

自然れ相生の松にあらず然りと雖も強て人工にあらもして之か説を求むれば前篇第六章は述べたる雌鶏の雄鶏と化するか如く一木の分れて雌雄とあるの變体なきにもあらざるべし果して然ふば此作用は其地質及び其吸収するの水に大なる原因なりて決して尋常の松の如く啻よ滋養物のみを吸収するよあらさるなりと

然るに吾人は幸に不思議探検の爲め昨冬關西よ行き攝坂の間に遊ぶことを得たり乃ち高砂に至り所謂相生の松を見るよ蓋し三百年來の古木よして全く雌雄の松を合接したる者なるとを知れり而して其傍に古木の切り跡あり土人傳へて言ふ是れ前代の相生松を切りし古株なりと是に依て之を見れば吾人の嚮きに想像したる二説の内後者雌鶏雄鶏ふ化するの道理を籍らざるも前者の唯好事者の

所に出ずる者なりとの說を以て說明し得べし其後漫遊を終て家に歸り石山軍記を讀みしに往古天正の度毛利侯の家臣發狂して高砂相生の松を伐りしとあるを發見したり因て想ふに今日伐跡のみを殘す者は乃ち其木あらん今生殖する所の相生松は其後或人の栽附たる所謂人工相生松なることと決して疑ふべからざるあり

此高砂の松に次で世に著名ある者は日光の繁れ松なり繁れ松と其本幹甚だ大にして枝皆他に垂れ各一幹となりて之より又枝を生ず其枝再び他に垂れて又幹となる遂次斯の如くして左右に廣かる殆んと十五六間に及ぶ者なり是れ全く一種の松にして決して又不思議なる者にあらず夫れ天下の物一として種類あきはなし櫻は花により實により或は其樹の性質に依りて其種類三百餘種に及ぶと

云ふ松に於ても亦然り赤松あり黑松あり曰く水松曰く羅漢松と其種類は多き蓋し數十種に及ぶなふん就中日光の繁れ松は北方寒帶の松にして魯領シベリヤ地方に至れば此種類の松甚多し然り而して松も他の植物と同じく土地の特質并に氣候の如何に依りて其形狀を異にする者なり今日光に寒帶地方の松あればとて之を疑ひ之を怪しみ遂に東照公の餘德に歸し日光繁れ松とて彼の相生松に比して類りに稱導もるば豈愚痴の至りならずや尤も此松は如何にして日光に生長せしやを疑ふは必要なる問題にして吾人も亦之が答辨を爲さざるべからず夫れ日光の地たる山高く風清く氣候寒冷にして恰もシベリヤに如き者あり故に自ら繁殖もるとあらんとも云ふべかふす而して其木は外國より献木したる者にして幕府の此を日光山に植し

者なるべし兎も角も我邦の人は未だ萬國の地理を暗記を以て少しく見慣れざる者あれば直に之れを不思議に歸し喋喋として之を唱道するは實に井蛙の亂鳴と云ふべきの

第三章　首縊り松

附死靈の池

武州川越町より熊谷驛に至る途上昔ゑ首縊り松なる者あり古來より此樹に於て各言ひ合したるが如く首を縊る者多きを以て斯く名けたりと云ふ此松今は已に枯れて在らざれども世間の廣き尚ほ首縊り松とか首縊り榎とか名けらるゝ者甚だ多かるべし俗人の言ふを聞くに前前首を縊りし者の亡魂が其友を呼ぶなりと然れども少しく道理を知りたる者は必ずや之を信せざるべし然らば何故に常に同じ松及び同ゑ榎ふて多く首を縊るや請ふ吾人の左に

說明するを見よ

蓋し人の思想は內因と外因とに依て種種に變動する者にして遂に此變動の餘り人をして發狂せしむるあるに例へば憂惱の時と歡樂の時とは人心の感動に於て同じからず又寂寞の境遇と繁雜の土地とは亦た人心の感動必ちも異なるべゑ前者乃ち其心より出る感動を內因として後者乃ち土地より起る感動は外因なり此外因と內因とゑ依り重に人をして同じ松とか同じ榎にて首を縊らしむるに至る此理を知らずして死者が友を呼ぶと云ふも可笑

已に述べたるが如く人心の感動は內因と外因とに依ると雖も就中氣候と活計上より起る感動は人をして尤も能く發狂し易からしむ故ゑ彼の發狂者の統計を見るゑ春と秋とに殊に多くして夏と冬とに甚だ少し又一月中にて云

べゝ月末の會計時よ多くして一年中よは年末の大晦日前よ尤も多し然らば首縊りの源因は氣候れ何如と活計の何如より來るといふも恐くは大差なからん春風台蕩蜂躍り蝶舞ひ草木も亦た將に狂せんとする時或は笑ひ或は怒り所謂發狂する者措て論せも金風蕭條葉落ち草枯れ四方漸く收まらんとする候獨り山間を行き眼を東西に注げば秋冷の候自ら殺伐にして中心亦た物淋しかるべし是時に當り路傍の松根よ踞し或は往事を思ひ或は未來を考ふるは何となく哀れみを覺へ加之晩鴉喧々として塒を求め蟀蟋唧々と去て傍に鳴き一として憂思を增さしむるの媒介あらざるはなし是於てか膽力の乏しき者は頻りに其身の無常に感じ生きて此憂きを受けんより寧ろ死するの優れるに如かずと感慨鬱勃又已むを得ざるとあらん是時に當り再び四眸を放てゝ恰も通當らざる松或と榎の樹の道よ垂り出たあり即ち急に首を縊らん事を欲し遂に之を實行するに至る此感情ハ我も人も同一よ去て即ち人の首を縊りし樹と他の人より見ても亦た死するに程能き樹と思ハるるあるるを見し即ち同一の木ふて首を縊る者多き所以あり豈に通常の植物に奇ふりと謂はんや

蓋し人には貴賤貧富の區別あく皆夫々の苦勞あり此苦勞ころ能く人をして發狂せしむるものなり而して此苦勞の據る所を考ふるに氣候貧困憤怒憂嘆等ありとす尚は悉く之をいゑば其氣候貧困憤怒憂歎等の爲め既よ幾何あ精神を錯亂し尚又獨り無人の境寂莫の地に至り所謂首縊り松の下なとを過らば嗚呼響よ此樹よ於て首を縊ぶさる者ふり吾亦た之に倣ハんなと急に死念を伴生すべ去俗

之を前前の亡魂が友を呼ぶと爲す豈に笑ふべきにあらずや之と同じく死靈の池として能く一池に於て數人の申し合せたる如く死する者あり是亦不思議にあらざるなり只夫れ彼は樹にて縊れ此は池にて死するの區別あるのみ

第四章　斧の入ちさる神木

附靈山名城に制禁あり去は戰國の遺風なる事武州高麗郡天狗の化杉

神社佛閣等の古木を伐らんとして忽ち暴風起り强雨至り激雷鳴々大地震ひ遂に伐る能はもして止をしとありと往々世話に聞く所ゐして俗人は信去て是皆神の奇特佛の靈驗の致す所となせり故に今より五六年以前迄に此山ふ斧を入るべからずとか其他種種の制禁の高札を懸けたる處甚た多かりき例へば越後國素門嶽の池に鐵物を禁もるが如き近江國彦根邊の山に陶器を禁ずるの如き或は三宅島島下名地の神山に伐木を禁ずるが如き或は武州川越北院の寺内に鳴鈴を禁ずるが如き若去之を冒す者あれば必ら ず暴風强雨等凡て恐るべき出來事の生ずることゝなせ之而して斯の如く國中に流布したる禁制は實に擧げ數ふべからず然らば果去て實際に於て此事あるか請ふ之を左に辨明せん

或人曰く池に鐵物を投し或い斧を以て木を伐らんとして暴風强雨の起るは其鐵及び木を伐るか爲ゑあらず全く丁丁たる伐木の音或は潑潑たる投鉄の響に感して然る者なり蓋し此宇宙ゑ五音の和より成る而して空際ゑ此五音を感ずる時は其音響の如何により或ゑ雨とあり或は風とあり以て其感應を表もる者なり例へば猶は人の外因より感して感涙を催し及び嬉笑を發するあるが如し故に今素門

嶽の池に鐵を投じて暴風強雨を起すは其鐵の爲ならず即ち鐵の池に入る時潑然として起る音響の空際に感ぜて然るなり又斧を以て神木を伐るに暴風強雨の起るは其樹を伐るか爲にあらず即ち丁丁として天に到る音響の空際に感ぜて然るなりと

以上は本意に就て從來尤も高尚なる議論として人の信服せし所なり然れとも空際に如何なる主宰ありて暴風強雨を起せしや之を神の昭靈に歸せんか之を佛の功德に托せんか二者共に非なり風は我れ其空氣の流動たるを知る雨は我れ其水蒸氣の凝集たることを知る何如なる主宰あるも何如なる音響なるも暴風強雨をして隨意に起さしむるを得んや然ちハ古者の所謂種々の名稱を附し制禁しさる個條を冒すも決して暴風強雨ならざるか曰く固より然り若し之れなちは則ち是れ偶然のみ

吾人嘗て以爲ふく我邦諸處に制禁の事なるは戰國の遺風にして後世之を改めざりし者なり何となれば昔時有智者の城を築くや必ちず宣言して曰く此城神助を得て冒し易らず故に一夫守りて千夫過る能はず曰く敵の攻め來る時此井を開けば四面皆霞となり敵をして歸路に迷はしむべし曰く鐵を携へて此山に入れば天地震動す曰く斧を提げて此地に來ちハ暴風雨なり曰く何曰く何と皆使恐的の說をなし以て敵をして容易に攻め寄ちさふしむるの手段と爲せり俗人察せず甲唱へ乙傳へ遂に世人を去て一般に其禁制に熟醉せゝむ己に之に熟醉するや久し豈又之を冒ゝて實際此事ありや否やを檢する者あらんや

武州高麗郡平澤村に俗稱天狗の化杉なる者あり數百年

外の古木にして斧鉞を加ふる者なかりしか或人已むを得ざるの事故あり竟に此木を伐れり然るに其人歸家して發熱し或は天狗の譫言を吐き或は木精の靈体を說き潛然として泣き啞然として笑ひ倏まして罵るか如く忽にして嘆するか如く喜怒時あく笑泣節を異にす一家憂惶助を百神に請ひ救を萬佛に求む絶て其功なし俗人忽ち說を爲して曰く是れ古木の靈此人に憑りたるなりと然るに醫をして診せしめしに醫は發狂の手續を以て之れを施療し五日にして全く癒しめさりと此事實と眞に俗人の妄想を破滅せしむるの好材料なり蓋し其杉は久しく天狗の化け杉と稱導されたる者にして之を伐りさる人も自ら好に之を爲せしにあらず實よ止むを得ずして伐りたる者なり故に其人の心を察するよ此木と古來よ謂れある大木なり若し

之を切らば或は天狗の怒を招くなきの若しくは木精の祟りに遭ふなきか然れども此度は樣蔭除なれば已むを得ざるなりと必らずや妄想を逞ふして充分の恐れを懷きしなちん故に其樹を伐て後忽ち神經の錯乱を來せしのと若し然らずして果して天狗病なりせバ如何なる名醫よても發狂の藥石を投じ僅に五日間に治せしむるを得んや

之よ依て之を觀れば我邦諸處にて言ひ傳ふる所の制禁を犯し往々其自身よ顯るゝ變事は皆當て懷きし妄想の其神經を錯亂せしめしに依る而して又實際暴風雨の起ゐれは是則ち偶合のみ豈に驚くに足らんや吾人嘗て試に川越北院ふ於て鈴を鳴らしたると前後凡う三回而して毫も奇事あらざりゝ其他も皆類推そべし若し吾人の說を以て非なりとする者ゐふば石を投じ陶器を捨て或は伐木もる等

所謂制禁を犯さて其如何を實驗せよ

第五章　祐天上人の劍難除　附成田山の守札

祐天和尚の糸引の妙號

在昔或る侯公先靈の追福を營まんとて當日一人の家臣を菩提寺に遣はし豫じめ饗膳の用意を爲さしめたり然るに此家臣性來酒に長けざるの爲め饗膳を試みんとせさに知らず識らず酩酊し其餘り曾時腕を枕とし熟睡せしか偶侯は從者を率ひ入來し家臣の方に熟睡して迎禮をも爲さず且つ法會の事は毫も手配りなきを見大に立腹せられ手擊にせんと彼の家臣を庭上に呼び出し一刀両斷と切りのけたるに少しも切れす依て又一太刀鐵をも透れと切り付けたれとも血たに出でされ〻大に不審に思ひ委曲を問へ〻其男答へざるなり乃ち裸にして其身体を改めしに頸

は祐天上人劍難除の守か一軸を掛けたり依て之を撿せしに不思議あるかな其名號「ズダズダ」に斬られたり侯此有樣を見て大に驚き家臣の罪を許せさと云ふ此說忽ち世上に流布し我も我もと祐天れ奇特を仰き彼の劍難除の妙號四方に行はるるに至れり

偖此事實に空說中の尤も空說にして世間に流毒せし事尠からざれば奮然之に筆誅を加へ已迷の地獄に呻吟せる俗人を不迷の極樂に極ひ出すは實に吾人學者れ本分なるべし先づ第一に其劍難除の守を考ふるに頸に掛けて敢て邪魔あらざる程の者なれば長さは幾許あるも幅は二三寸に過きざる一小軸あらん然らば其心木も亦之れに準ささる者なるべし故に假令之を南蠻鐵にて作るも固より知れきつたる者なり夫れ失石雨の如く吶喊雷の如き戰場に於

ては幾枚の名兜を重ね着たりとて其上より一太刀斬り付けられなば梨子割に咽際迄も斬り下げらるる抔聞くも恐ろしき次第なり然るに今彼の熟睡したる家臣の肩先よ巡れる祐天の妙號僅かに箸の如き者が邪魔になりて遂に斬る事能はずと云へば其矣の微力驚くべきよあらずや然れども世間斯の如き微力者は決して有らざるなり故よ此世話は唯祐天の功德を顯さんが爲に設げし者なると又疑ふべからず果して然ふへ其或る矣公の爲には大なる誹辱を與へたりといふべし

然りと雖も一矣公よ誹辱を與へさるは害の小なる者なり其愚民を惑はしたるの害は實にいふに堪へざるものあり近くは身代り札として下総の成田山は勿論諸國に勸請せる成田山より賣り出す守札あり是等へ皆祐天上人劔難除

の妙號より按出せる者なり吾人嘗て其身代り札なる者を視るよ概ね脆弱にして之を膚に附くる時は久しきうちには自然に碎くる如ク者なり故に之を帶ひし者若し木より落ち或へ川に溺れし時幸にして死に至らず乃ち喜悅の餘り身代り札よ別なきやと注意を起し開て見れば既に片々と破碎せるを以て此御札我命よ代れりと直に成田山の靈顯に感ずる者なり吾人又嘗て川越不動尊の身代り札を購ひ之を胸にたるとなり數月を經たる後之を開き見たに其札已に碎けて片々たり是に依て之を觀れば彼の身代り札を持つ者は常に其札の靈顯なるを信じ一たび袋にたる以來大切よ掩ふて見ざるを以て已よ破碎して片々たるも之を知らざるあり少しく危險の事あり然後之を見始めて其破碎せるに驚き之を喋々もるのみ然らば則ち前段の

世話は全く僧侶が愚民を欺き其靈顯を示さんが爲め唱導せる架空の妄誕なり手短よへば金錢を貪らんが爲め或る族族を綴り此空說を作爲せしのみ若し萬が一にも然らすして祐天和尙劔難除の妙號其奇特を顯はゝ其眞に斬るとも能わざりしならば其族何如よ愚鈍なりとも何ぞ直に此妙號を甲冑に仕迄み已れ天下の覇たらん事を冀望せさらんや夫部下の兵士よ此妙號を與へ置かゞ決ゝて敵に殺さるるとあきを以て萬國を一統するも蓋し難よあらざるべゝ

序に爰に述べんと欲する者わ彼の有名なる祐天和尙糸引の妙號あり原來能書名画及び名作の器は世人の唱導も

る者極めて多ゝ例へば嵯峨天皇の能書を始め上野山門の吉祥閣の文字の如き前天台座主大明院の染筆にして四方より望みて之を讀むべしと云ひ花山院德愛公の染筆なる

噂の掛物の如き盜賊除となると云ひ狩野家數氏の名画及び左甚五郎の彫刻等の奇は諸國に存在する由にして三尺の童子も皆之を知らざるはなし尤も是等の奇を唱ふるゝ妄は乃ち妄なりと雖も唯其書画彫刻れ神よ通じ妙を極めさるを稱そるに止るを以て害を世間よ流すと少なし彼の祐天和尙糸引の妙號なる者は乃ち然ちす是れ吾人が特に之を辨ずる所以なり偖其糸引の妙號とは祐天の染筆にかかる掛軸にして清心潔白の人其手を淨め軸前に座し堅く合掌して動がざる少時漸くにして其書の靈妙よ依り五指より蓮糸の如き細線の續出するを視るべし是に於てか愚者其奇異に感益信心骨に徹するに至る今其蓮糸の如き細線の續出たる所以を老ふるに決して祐天の書の靈妙なるにあらず豫期意向の有無塵埃の多少及び皮肉の脂肪よ

依りて生ずる者よりして毫も異しむべき者なし今一一之を證明せんと欲すれども紙數の限りあるを以て唯左に其所謂蓮糸の如き者を出すゝ當然の理なる証を歴舉し以て此章を終らんとす

（第一証）獨り祐天の妙號のみならず吾人の書よても摺鉢よても鼠糞にても何者を論せず之を拜もるの法宜しきを得れは蓮糸の如き細線を生すべし

（第二証）不正人にても脂肪多き者は早く之を出し正人にても脂肪少き者は遲く之を出す故よ其遲速は脂肪の多寡に依り決して人に正不正に關せず

（第三証）早天郊野よ出で其妙號を拜もれば何如に久しきに溺ても決して出るとなし是全く塵埃なきに依る故に蓮糸の如くに見ゆる者は塵埃（なり

第六章　金毘羅の鰐口

附淺草寺の鐘自ち鳴りし事

傳へ聞く金毘羅鰐口は經五尺よ餘りたる大鰐口なり故に在昔之を献納もる者斯の如き大鰐口を納むる者と我にあらずして誰ぞ外よあるべきと頗ぶる傲慢の色ありしと然るよ金毘羅權現之を惡みて御受なきよや掛ても落掛ても落ち迚も掛り居る有樣なければ遂に落ちたる儘之を地よ一今猶ほ存すと是れ象頭山よ參詣せし者の之を見て益金毘羅の靈驗よ驚き益之を稱導もる所のものなり然るよ今學術上よりして其落る理由を考ふるよ甚た著明なる道理あり左よ之を説明すべし

蓋し金毘羅の鰐口ハ最も能く製造したる者なるべし夫れ製造の甚た能き者は他の音響に感すると早く而して其

感すること烈しければ遂に小踊りをなすに至る今之を證するに先づ樂器の構造より說き及ぼすべし夫れ樂器を構造する者に上工あり妙工あり上工は百歲數人を得べけも妙工は千年に一人のみ其妙工の作る所の樂器は悉く宮商角徵羽の律呂よりなるを以て能く五音の妙音を出す即ち西園寺家の琵琶二條家の太子丸の笙及び豊氏傳來の新羅義光の笙の如き妙妙の樂器は所謂妙工の作りし者よりして彼の宮商角徵羽の律呂に合ひ所謂天地感應の名器なり近くは天保年中江戸上野より於て奏樂なりし時金龍山淺草寺の鐘俄に呻を出して止まず遂に上野の奏樂の止むに至つて亦之止ることあり是れ淺草寺の鐘は名器よりして上野にて奏する音樂の響に感應して呻りし者なり蓋し此響なる者は物体の分子他の感動を受けて互に振盪するより起

るものにして妙工の作りたる樂器は其振盪するとの甚さ容易なるに依るのを今爰に藤あらんに片薄なる細線に製して後之を空中に置き風ふ中つる時は必ず呻るべし又彼の巧妙なる樂器は之を空中に釣り風に當らしむれば屢鳴るとなり然るを況んや淺草寺の鐘に上野より來る奏樂の音響を感ずる時は自から呻り出すか如き怪しむに足らず唯少しく不思議となすべけは上野より淺草に至る迄には數多の寺院ありて鐘の數も亦た甚た多かるへし然るに是等の鐘には毫も響なくして獨り淺草寺の鐘のみ呻るは在り然れとも淺草寺の鐘は所謂妙工の手に成りし者よりして能く上野の奏樂と自然其律呂を合したるも其他の鐘は皆凡作なるを以て律に協はざる者なりと知らは此疑も忽ち氷然として了解し得へし

是に依りて之を觀れば天下の廣さ他の響きよ感じて自ら鳴動せる樂器も少なからざるべし今金毘羅神社の鰐口を社前に掛けんとして能はざるの理由を考ふるよ是亦た全く淺草寺の鐘上野の奏樂よ感ずるが如く他より來れる響に感じ鰐口の分子互ひ相振動して頓て微響を爲し小踊を爲して遂には掛金を外るるの有樣あるより日日來集せる參詣人に若しも怪我ありてはと懸念の餘り遂よ取り外して地よ置きしなるべし而して此鰐口の鳴動は信者の膽に銘し益信仰を深くし大に金毘羅神社の僥倖をなすよ至れり

偖已に述べ來りしが如く金毘羅の鰐口は他の音響に感應して鳴動する者なると又疑ふべからも然らば其昔響ね何れより來るやと云ふに金毘羅社神對ひの海中に於て一

大巖石あり怒濤常よ之よ激して聲萬雷の如し故よ其響て鰐口に奇狀を呈せしむる大根源と云ふべし果して然らば其鰐口の鳴動する者は鳴動せざるべからざるの根據あり然るに世人は之を見て直に金毘羅權現の靈顯とおす誤れりと謂ふべし

第七章　三井寺の晩鐘

苟も我日本人ありせば假令三尺五寸の童兒と雖も近江國三井寺の鐘を知らざるなかるべし然れとも天下の廣き寺院の多き鐘豈三井寺にあるのをあらんや而して何故に獨り此鐘のみ斯く人口よ膾炙するや昔時武藏坊辨慶の由緒を以て然るか將た藤原頼業卿の歌を以て然るか想ふよ當是等れみに源因せるにならず即ち通常の鐘は日沒に及んで鏘然晩を報ずるも其音陰濁にして能く遠方に通せざ

る者なり然るに此三井寺の晩鐘に獨り陽聲を放ち數里の外に聞ゆるを以て然く人の稱する所となれる者なり

抑此晩鐘は何故に陽聲を發するや是れ爰に辨明する所よして人或は三井寺の晩鐘に琵琶の湖水に響くを以て陽聲を發すと說けども是れ未だ一つを知りて二を知らざる臆說たるを免れず何となれば若し湖水に響くを以て晩鐘に陽聲を發する者とせば石山寺も三井寺と同じく陽聲を放つべきなり然るに其音通常の陰聲なり此外湖水の傍よある寺院其數少なからずと雖も何れの鐘も人皆不問に措き獨り三井寺の鐘のみ喋喋する者は必らず其由緒なかるべからず

往古智證大師の園城寺を開きし以前此山中には三個の井ありて其水たる純粹にして能く清めりと云へり其後爰に

二寺院を設けしを以て直に之を三井寺と名けたり而して其井に至て考ふるに此地に限り地質の他に異なる所あり想ふに上に一面に土壤あるも其下には幾層の磐石相重疊して恰も太鼓の如き有樣をなせり然り而して其水甚だ純良なるを以て一種特別なる微妙を備へ鐘を衝けば地下の磐石に通じ晩鐘と雖も陽聲を發し其音艶しくして而も遠く聞こゆ幽妙の響人をして感せしむるに至る此理を知らずして獨り琵琶の湖水に響て然りとなす豈に一を知て二を知らざるの論にあらずや

蓋し地層の如何に依り微音を傳へて鏘然として能く陽聲を放つは其例少きにあらず武藏國横見郡に田甲の「ポンポン」山あり羽前國東置賜郡に一年坊の勝地あり是皆自然に陽聲を放つの地にして三井寺の位置正さに斯の如きの處に在り

第八章　天國の寶劍

日本刀の鍛練の秀たるは遠く歐洲刀の及ばざる所にして我邦の有名なるシフィルド及びボルヨンハムの製刃場に於ても日本刀と比較し得へき者到底製するを能はざるあり先づ日本刀を見るに其刃の艶、のある其鋒の鋭き眞に世界無比の優物と稱もべき者にして(中略)日本の武士か一たび之を揮ひ肥豕を両斷して刀跡鋸痕を殘さざるは通常の事なり又鉛を斬り鉄を斷つも敢て珍らしきことにあらず云云とは實に英國の「アイアン」新聞に記載せし所にして我日本刀を稱揚せし者あり原來我邦は尚武に建國よして鐵堅く水清く自ら寶劍の出づべき所なり故に今世界各國の劍類を集めて其性質を吟味すれば日本刀を以て尤も美麗なる者と一最も鋭利なる者とする者とは啻にアイアン新聞のみならず既に歐米各國よて許す所あり

抑も古昔より傳はりたる十握の劍草薙の劍の如きは勿論人皇卅四代崇峻天皇の頃初めて刀劍に銘を置く迄の間は名劍の出づるあれば直に之に名くるよ天國の寶劍を以てせり其然る所以を考ふるに人皇五十代平城天皇の時大和國に天の座及び天國と呼ばれし名工あり其鍛ゆる所至美至鋭恰も古代の寶劍に髣髴たり是に於てか刀劍の歴史に暗き人々は古昔の寶劍も此天の座及び天國の作に出でし者と思意し遂に稱するに此名を以てするに至る故に所謂天國の寶劍とは普く崇峻天皇以前の刀劍は勿論其以後の刀劍と雖も鍛練の勝れて美しき者の總名なりと知るべし然而一て又之に就き俗人の喋喋する所を聞けば其寶劍の内には稀代の名作ありて若し一だび之を拔けば血を

見されば決して鞘に納まちざる者あり或い鍔元より血烟雲き登て龍の出る者あり或い其鋒先より霧或は雨を催す者ありと是れ少き道理を知りたる者の信ぜざる所なれども彼の愚人們は甲唱ひ乙和し確く信じて疑いざる者の如し是れ吾人の本章を設くるの止むを得ざる所以なり

血烟を立て龍の登る如き者ありや曰くあるなし然ちば何故に龍刀とか村雨とかの名稱ありや曰く是唯形容を以て稱したる者あれば之を眞正よ信するは大なる誤りなり精言せば其刀劍の鍛練により大亂れと稱ち小亂れと呼ひ或ち水の垂るか如き者あり鍔元より蛇の登るか如き者あり凡て其摸様の如何により形容じたる名稱なり故に龍刀と名くるも其刀より龍れ登るにあらす又村雨と名くるも其刀を拔けい鋒先より雨を催す等の事あるよ非ちす唯其鍛方よ依り波紋を形容しさるのみ原來形容なる者ち人を ち感動を與ゑんか爲に設くる者なれば概して其實際よ り大なる者なり今人を斬るの狀を言はんに講談師は必す や眞向梨子割り車斬り云云の語を用ゆるなるべし然れと も實際其敵對せる人を斬るよ決して梨子を割り輪を廻す が如く容易なる者よあらず又絶世の美人を評せんに文章 家は必らず膚は雪れ如く腰は柳の如く云云の句を用ゆる なるべし然れとも實際に於て何如なる美人なるも雪の如 き白膚柳の如き細腰あるべからす若し是れなりとせば乃 ち一個の化物ゐして我か人間界の美人にあらざるなり故 に是等の如きは凡て形容語たるよ過ぎざるを以て之を眞 成に信ずべからす吾人は又進んで讀者をして了解し易か らしめんが爲め複雜を厭はず更に直接なる刀劍の例を引

くべし夫れ詩文家若しくは小説家其至美至鋭なる刀劍を評するに當て唯有の儘に一條の感と書きしのみにては人をして感動せしむるの雅趣なきを以て乃ち曰く「煌煌たるかな七星の文照輝て三尺の氷寒し」と或は曰く「露結び霜凝て半輪の月かと疑ひ邪を退け妖を治めて千載の寶と稱す」と或ハ曰く「豐城三尺の氷吳宮一函の霜神龍も之か爲に雲よ吟じ鬼神も是れか爲めに夜哭かん」と或は曰く「奇なり妙なり燒刃の盡處天に虹蜺の引く如く地に清泉の流るるに似たり」と或は曰く「拔けバ玉散か雷か露か曰く何曰く何と」是に於てか名くるに村雨龍卷貫虹遠麿小烏拔丸龍泉あと」を以てもるに至る畢竟其名稱は鍛ひ方の形容に過きも豈に實際其奇あるべけんや

然りと雖も愚民輩れ彼の俗説を唱ふるは啻に其形容の

語よりれみ誤り來れる者に非ず吾人ハ嘗て日本書記を讀み寶劍天の叢雲の上にと常に雲氣あり云々の語あるを見俑を造るの始めは實に日本書記あるとを知れり何とあれバ其後腐儒之を讀で文章ハ寶劍の奇現なるを記し戲作者ハ又之を讀んで稗史ハ寶刀の奇現を演し遂に世人を去て名劍には必らず異塲に寶刀の奇現を演し遂に世人を去て名劍には必らず異あるとたる現象ありと想像せしむるに至りたればなり夫れ古代の三作と稱せられたる宇佐八幡の社僧神息三池傳太光世及び伯耆の安國より其後宗近兼光國綱義光正宗貞宗國俊等の名工續々として輩出せ去ハ是等の人々ハ皆能く鐵質と水熱の關係を明かにし所謂鍛錬術に於て其蘊奥を極めたる者なれバ陸にと犀象を斬り水にハ蛟龍を斷つの名刀を製出するに至る是に於てか彼れ叢雲の劍抔に倣ひ

種々の不思議なり名稱を附するゝ至る又己むを得ざるなり然れども既ゝ述たるの如く刀劍に就いて決して不思議の述あるにあらず世人請ふ迷ひを晴らせ

明治二十一年二月九五日出版御届

定價金二十二錢

著者　埼玉縣平民　新井周吉
東京本郷區元富士町二番地

版權所有

發行者　關田倉吉
埼玉縣入間郡三百十一番地
東京本郷區元富士町二番地

發兌所　盛春堂書舗

明治廿一年二月廿四日刷成
東京本郷區元富士町二番地
福岡縣士族
印刷者 坂本豐彦
神田區仲猿樂町三番地

大政事家 虞拉士斯頓立身傳附 英國時事

右書ハ政事家立身必要奇書ナリ上下合本定價金壹圓四十錢特別割引金七拾錢外ニ郵税金三拾錢

献金餘聞 天保紳士 全壹冊 定價金貳拾五錢 石版密畫入 郵税八錢

此ノ書ハ海防費献金ニ付社會ニ起リタル絶妙之良小説書ナリ

花月寄興 全貳冊 定價三拾錢

此書ハ春夏秋冬各百詩宛合四百詩摘集シタル有名詩集詩家座右ノ作例トナル良書也

波斯奇談 奇遇夢物語 定價金三十五錢 郵税十錢

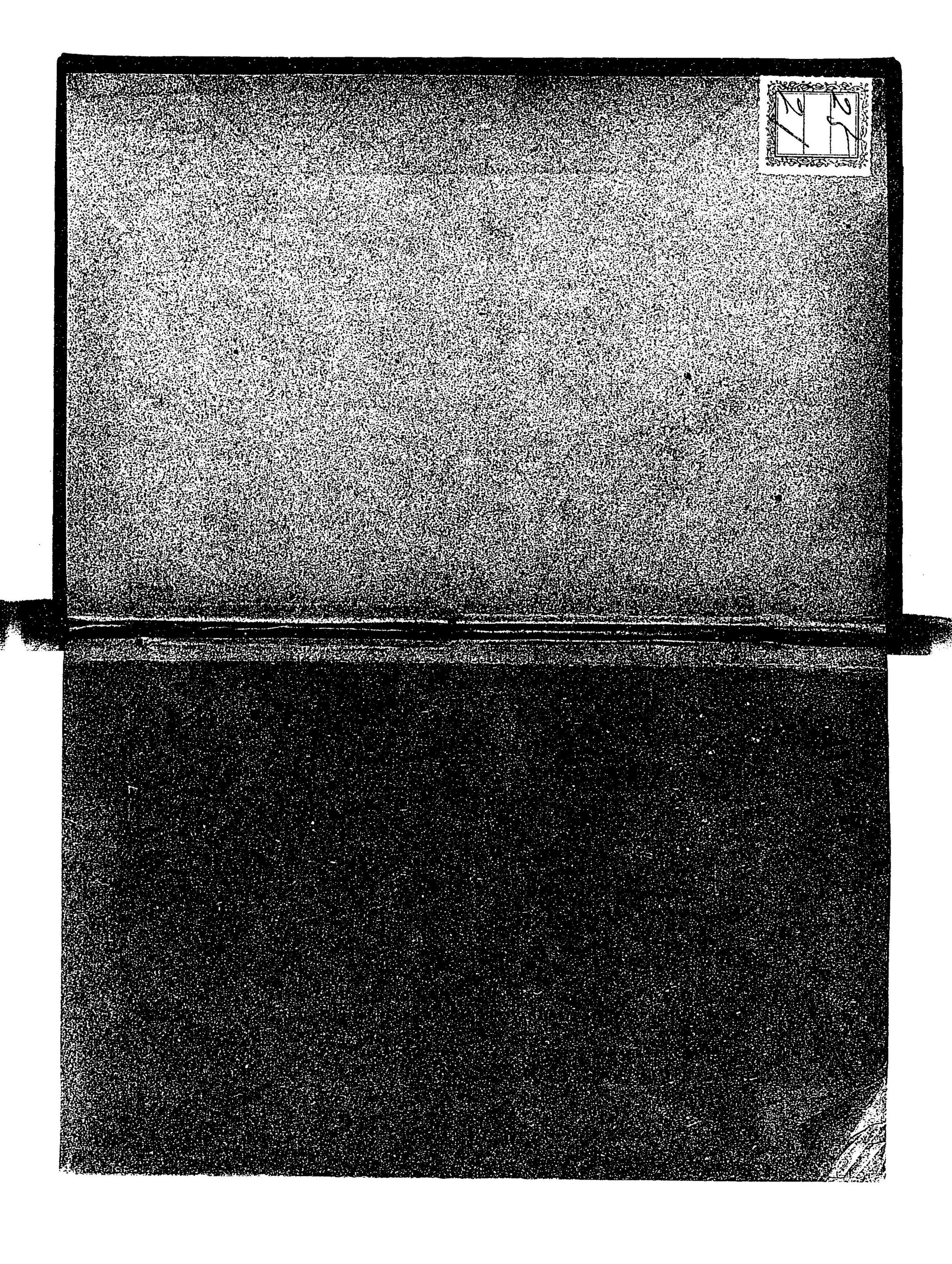
東京並各國大賣捌所

東京　金港堂書店
仝　上田屋書店
仝　辻岡文助
仝　開成堂書店
仝　晩青堂書店
仝　哲學院書房
仝　撮々堂書店
仝　普及舍
仝　警業書店
仝　丸善書店
仝　大倉孫兵衛
仝　博文社書店
仝　成文堂
仝　湊屋佐吉
仝　杉本書店
仝　春陽堂書店
仝　正文堂書店
仝　松月堂
仝　石川書店
仝　金剛閣
仝　黑雲堂
仝　高橋修之助
仝　大川屋廣吉
博文堂

同　東京　集成社
同　大川錠吉
同　鶴聲
同　吉田正太郎
同　中外堂書店
同　尚成堂書店
同　鳴東館書房
同　耕文堂書店
同　辻本尚書店
同　須原鉄二
同　黛書店
同　中西屋書店
同　矢田文壽
同　法木德兵衛
同　團々社支店
同　岡島書店
同　日野支店
同　大坂　大黑屋書店
同　西京　澤集光堂
同　改進
同　大橋十郎
新潟縣長岡　目黑書房
同　伊勢安書店
仙臺　木村文助

同　鹿兒島縣
同　埼玉縣
同　熊本縣
石川縣
甲府
磐城國
福岡
博多
岡崎

富山仲吉
大黑一郎
長島屋
明文堂
雲根堂
五明堂
清水屋書店
山崎登
河內文助
本屋吉

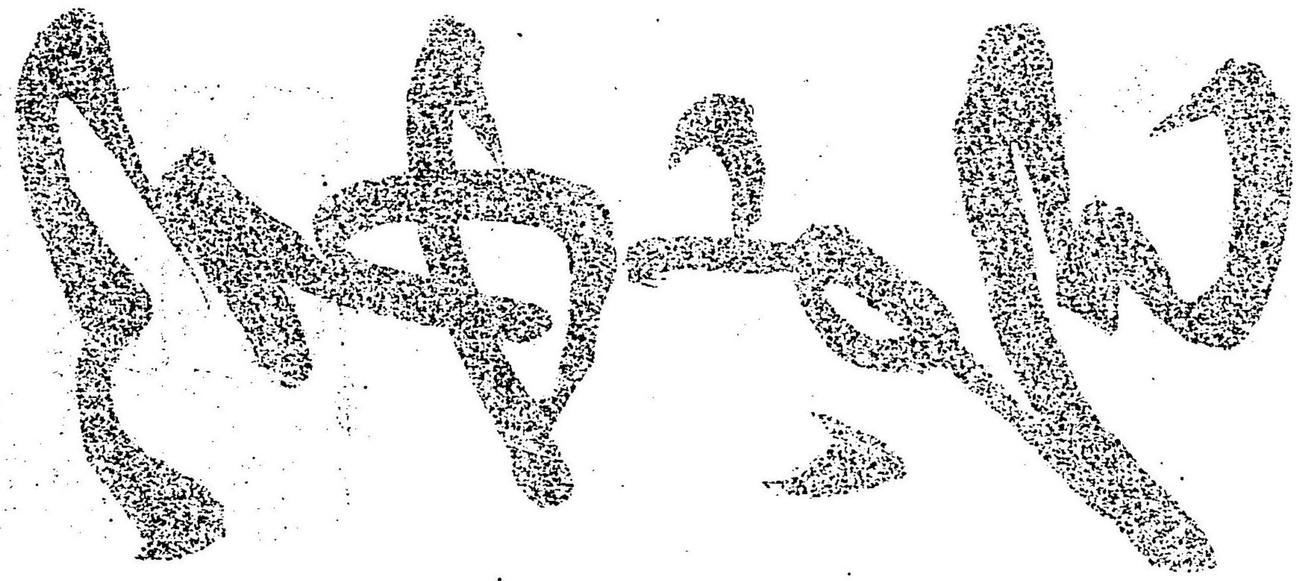


25
21

023103−000−8

25−21

不思議辨妄

新井　周吉／著

M21
ADB−1111